

佐賀市文化財調査報告書第46集

かん のん い せき
観 音 遺 跡

平成5年3月

佐賀市教育委員会

発刊にあたって

この報告書は、平成3年度農業基盤整備事業の施工に先立ち、佐賀市教育委員会が平成3年度に発掘調査を実施した観音遺跡1区の発掘調査報告書であります。

観音遺跡が所在する北川副地区は、佐賀市域南部に位置し遺跡の密度が低い地域ですが、近年新たな遺跡の発見が相次いでおり、本遺跡もその例のひとつであります。

調査の結果、鎌倉時代から江戸時代に属する井戸・溝・土壇を、また、土師器（杯・皿）、瓦器（椀）、磁器（椀）などの遺物を検出しました。

今回は調査範囲が狭く、集落の一部を確認したにすぎません。しかし、今回検出した鎌倉時代の井戸と屋敷地の区画と思われる溝は、地元で伝承される「屋敷の内」という地元呼称に何らかの歴史性が存在することを証明した非常に興味深い発見でした。

本書に収録されたこれらの貴重な資料が、郷土の歴史研究や文化財に対する認識と理解に少しでも役立てれば幸いです。

最後になりましたが、調査を行なうに際しまして多大なるご協力いただきました地元の方々はじめ関係各位に対しまして、心から厚く御礼申し上げます。

平成5年3月

佐賀市教育委員会
教育長 野 口 健

目 次

I. 序 説	1	IV. 調査の記録	6
II. 遺跡の位置と環境	2	V. 小 結	24
III. 調査の概要	4	VI. 観音遺跡出土容器類の定量分析	26

例 言

1. 本書は、農業基盤整備事業に伴い、平成3年度に実施した観音遺跡1区の発掘調査報告書である。
2. 調査は、佐賀県農林部の委託と国庫補助を受けて、佐賀市教育委員会が実施した。
3. 調査地の所在及び規模などは、以下のとおり。

遺跡登録番号	5117・6011	遺 跡 略 号	KAN-1
調 査 地	佐賀市北川副町大字光法	開 発 面 積	360,000m ²
対 象 面 積	480m ²	調査実施面積	480m ²
調 査 期 間	平成3年7月8日～12月26日		

4. 発掘調査・整理・報告書作成の作業分担は、以下のとおり。
表土除去：山豊建設株式会社 空中写真：有限会社空中写真企画
全体遺構実測：(有)若楠測量設計 遺構写真：角信一郎
個別遺構実測：角 遺物写真：角・前田達男
遺物復元：吉田典子・横尾ますよ 遺物実測：貞包洋子・前山光子
製図：貞包・前山・前田
5. 調査記録類・出土遺物は、佐賀市文化財資料館（佐賀市本庄町大字本庄1121番地）で、一括保管している。巻末の収蔵品目録を参照されたい。
6. 本書の執筆は、角と前田が行い、編集は、角と協議して前田がこれにあたった。

凡 例

1. 遺構については略記号を用いる。調査遺跡毎に連番号をつけ、番号の前に遺構分類記号を付けた。SD：溝、SE：井戸、SK：土壌。
2. 原則として、遺構の測定値はm単位、遺物のそれはcm単位とした。
3. 表示した方位は、すべて座標北（G、N）である。
4. 容器類の掲載図で、断面が白ヌキのものは土師器、断面が網カケは瓦器、断面が黒ヌキは須恵器・陶磁器は、断面斜線は石鍋を表現している。
5. 容器類で、完形とは破片の接合によって完形状態にあるものをいい、完存とは破損が認められない完形状態にあるものをいう。

1. 調査にいたる経過

I. 序 説

1. 調査にいたる経過

平成2年10月26日に佐賀県農林部から、36haにわたる平成3年度北川副地区農業基盤整備事業計画が提示された。この計画を受け、佐賀県教育委員会文化課（現文化財課）は佐賀市教育委員会社会教育課（現文化課）からの調査員派遣によって、平成2年11月に当該地区の埋蔵文化財確認調査を実施した。

この調査の結果、周知の埋蔵文化財包蔵地以外の地点で、全体範囲は不明であるが水路予定地で480㎡の範囲で遺跡の存在が確認され、観音遺跡として周知化を行った。

この調査結果に基づき、県農林部・県文化課・佐賀市土地改良課・市社会教育課の四者で埋蔵文化財の保護に関する協議を実施した。その結果、遺跡が確認された部分は水路予定地にあたり、計画変更による埋蔵文化財の保存は困難であった。そこで、遺跡が確認された480㎡については、市社会教育課が県農林部委託事業と国庫補助事業によって発掘調査を実施し、埋蔵文化財の記録保存を行うことで協議がまとまった。

発掘調査は、平成3年7月8日に表土剥ぎを行ない、人力による調査は平成3年11月12日から開始し、12月26日にすべての現場作業を終了した。出土遺物の整理作業および発掘調査報告書作成は、平成4年12月から翌5年3月にかけて、佐賀市文化財資料館で行なった。（前田）

2. 調査の組織

調査主体 佐賀市教育委員会

平成3年度（発掘調査）

事務局 佐賀市教育委員会 文化課
文化課長 中野和彦
文化係長 野口義通（庶務担当）
文化財係長 福田義彦
事務吏員 甲木亮一（庶務担当）
角信一郎（調査担当）

平成4年度（報告書作成）

事務局 佐賀市教育委員会 文化課
文化課長 中野和彦
文化係長 野口義通（庶務担当）
文化財係長 福田義彦
事務吏員 増田耕輔（庶務担当）
角信一郎（報告書担当）
前田達男（報告書担当）

発掘作業員 伊東ノリ子・託間まさ子・真崎イサ子・公門昭子・西村トメ子・山田久子・貞包久枝・大宝美津枝・中溝正治・林ヤスノ・式町貞子・式町清子・中村茂代子・吉原スマ子・江口ヒロ子・真崎章江・横尾エイ子・酒見節子・千住昭代・篠原キクエ・井田英子

調査協力 地元各位・佐賀県教育委員会・佐賀県農林部・佐賀市土地改良課・北川副土地改良区

II. 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置

佐賀市は佐賀県の東南部に位置し、東は神埼・千代田・諸富町、西は大和・三日月町、北は大和町、南は東与賀・川副・諸富町と接している。市の北部には脊振山系が連なっており、その南麓には舌状丘陵が派生している。また南には沖積平野が有明海沿岸まで広がっている。

今回調査を実施した観音遺跡は、沖積平野の南部、標高2mほどをはかる低平地にあつて諸富町とのほぼ市町境に位置し、佐賀市街地を北西にみる。周辺は北に位置する国道208線沿道周辺に開発の手が及んでいるが、それより以南は大部分が農地として利用されており、周辺は佐賀平野特有のクリークが縦横に走っている。同遺跡も周辺をクリークに囲まれた状況下に位置している。(角)

2. 歴史的環境

佐賀市内には数多くの遺跡が存在しているが、その大半は市内北部の脊振山麓部一帯およびそこから南に広がる平野部に集中しており、南部には遺跡があまり存在しないとされてきた。しかし、近年南部地域の農業基盤整備事業が進むにしたがい、新しい遺跡の発見が相次いでいる。観音遺跡のほかには、弥生時代に属する瓦町遺跡 [前田・牟田1992]、古墳時代～鎌倉時代の阿高遺跡 [福田1990a・1992、前田ほか1990]、古墳時代～江戸時代に属する寺裏遺跡 [福田

1992]、鎌倉時代～江戸時代に属する梅屋敷遺跡 [福田1992] がある。

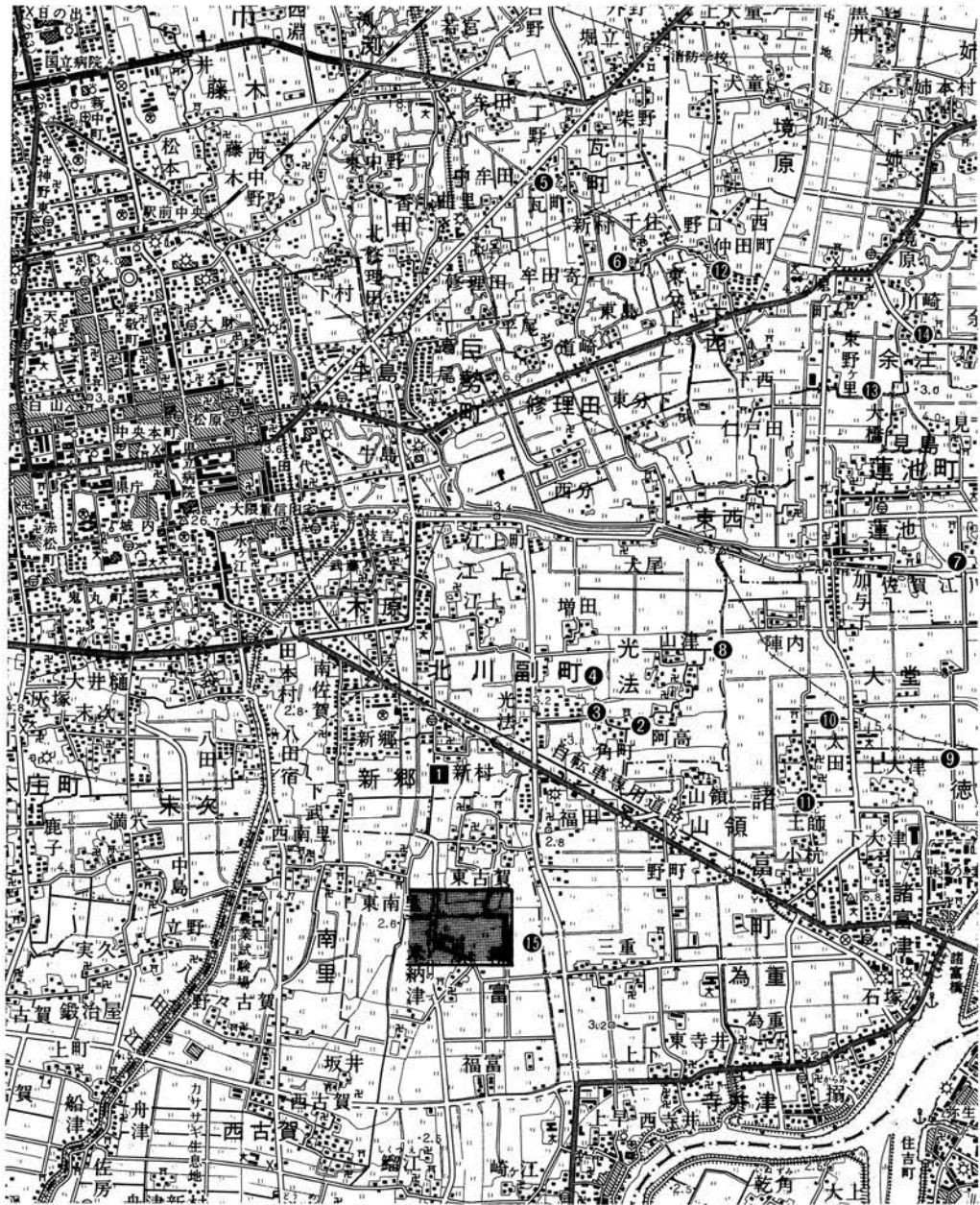
また、周辺で周知されていた遺跡には、弥生時代～鎌倉時代に属する柴尾橋下流遺跡 [福田1983]、平安時代～鎌倉時代に属する蓮池上天神遺跡 [福田1984]、弥生時代～古墳時代に属する掘立柱建物群を検出した牟田寄遺跡 [福田1990b・1993、前田ほか1990] などがある。

このように遺跡の新発見、調査で遺跡の分布状況、性格が明らかになることによって佐賀市域南部域の陸地化および生活圏の推移をとらえることができよう。また、佐賀市の南に接する諸富町で数例の遺跡調査報



Fig. 1 観音遺跡位置図 (1/1,000,000)

2. 歴史的環境



- | | | |
|---------|-----------|-----------------|
| ❶：観音遺跡 | ❷：牟田寄遺跡 | ❸：土師本村遺跡 |
| ❹：阿高遺跡 | ❺：蓮池上天神遺跡 | ❻：貴別当神社遺跡 |
| ❻：寺裏遺跡 | ❼：唐人廟遺跡 | ❼：余江西二本松遺跡 |
| ❽：梅屋敷遺跡 | ❽：徳富権現堂遺跡 | ❽：川崎遺跡 |
| ❾：瓦町遺跡 | ❾：太田本村遺跡 | ❾：河副莊干拓地（高城寺文書） |

Fig. 2 観音遺跡周辺主要遺跡分布図（1/50,000）

II. 遺跡の位置と環境

告がなされており、今後さらに市域南部で新しく遺跡が発見されることが十分考えられる。(角)

III. 調査の概要

1. 調査の概要

調査は掘削機による表土除去作業から着手した。表土除去作業は7月に行ない11月の人力による本格的な作業に入るまで期間があいていたため、調査区の周辺ではすでに工事が着工されており、調査区内は廃土や重機の侵入等により荒らされた状態になっていた。そのため廃土の除去後、再度掘削機により堆積した土の除去作業を慎重に行なった。除去後人力による掘削及び記録作業に入った。

作業は遺構検出から開始し、調査区内全体に国土座標を基準に5m方眼のグリッドを設定し、グリッドに調査区の北西角から東へ1・2・3・4…、南へA・B・C・D…と名称を与えた。検出終了後遺構の掘り方を進めながら遺構配置図の作成を行ない、各遺構に遺構番号の設定を行なった。

検出した遺構は、井戸及び土壌は半切を行ない、土層図の記録作業を行なったのち掘り上げることを基本とした。また溝は部分的にベルトを設定し土層図の記録作業を行なった。また井戸等の完掘するまでに及ばなかったものを除いてすべ完掘し、平面図は1/20の全体遺構図に記

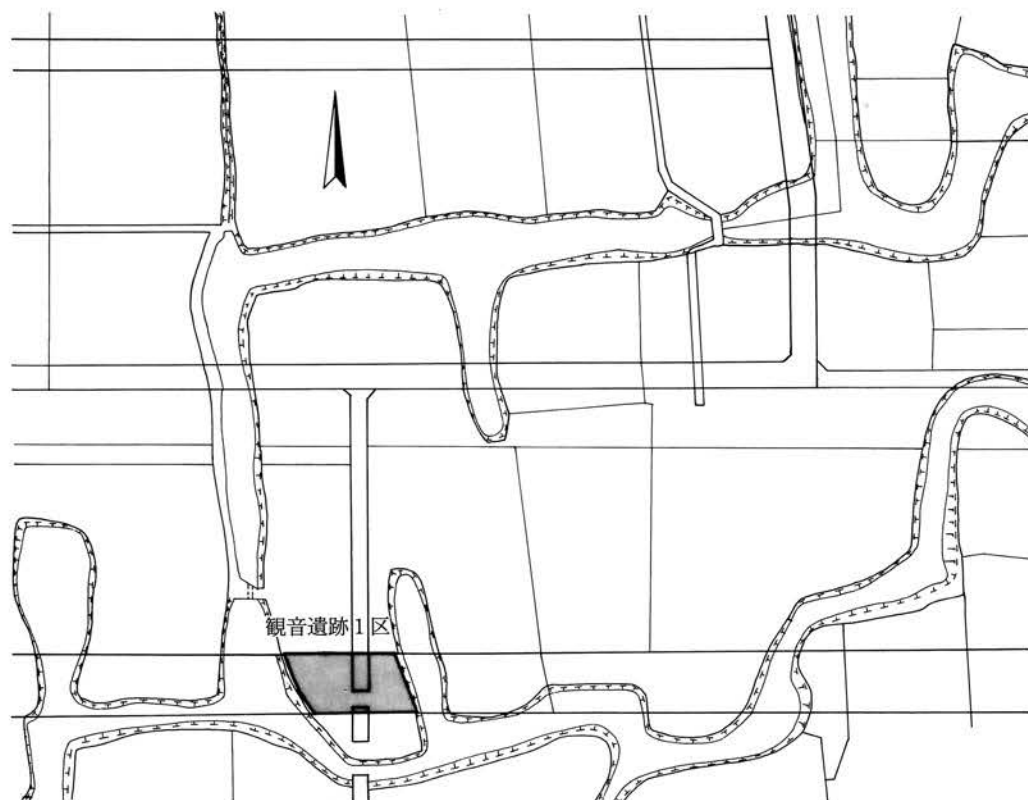


Fig. 3 観音遺跡1区周辺図 (1/2,000)

1. 調査の概要

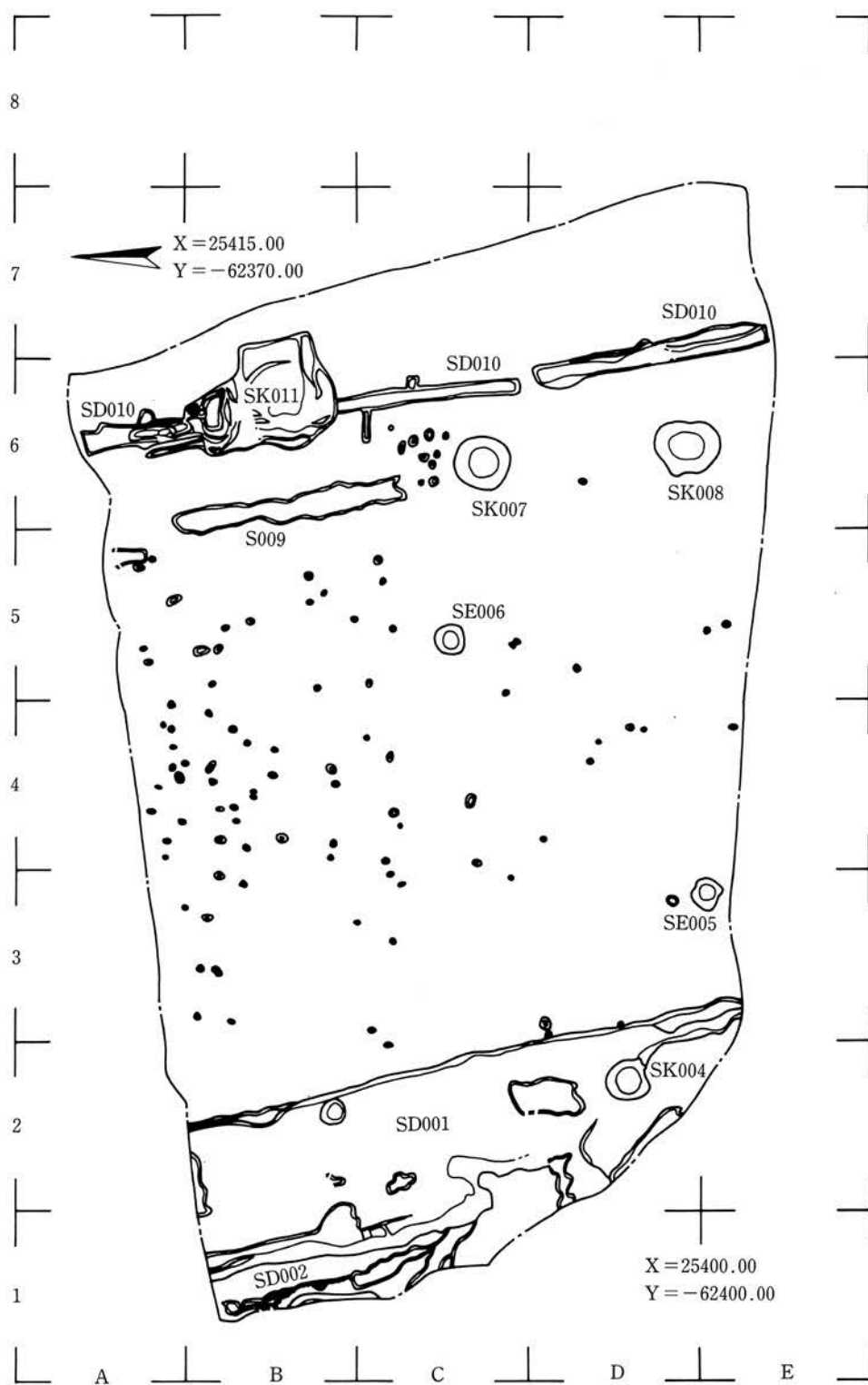


Fig. 4 観音遺跡 1区遺構配置図 (1/200)

III. 調査の概要

録し、必要があった遺構は個別の記録作業を行なった。(角)

2. 遺跡の概要

調査区の表土は0.3m～0.5mほどで層順は上から現水田耕作土、床土、灰褐色土を基本とした堆積状況を示し、その下に遺構検出面である基盤の黄灰色粘質土がある。黄灰色粘質土から0.5mほど下がったところから青灰色粘土となる。遺構検出面の標高は1.7m～2.0mほどでほぼ平坦であったが、前述したとおり調査区が荒らされていたため本来の遺構検出面から若干下がっている。

今回検出した遺構は井戸3基・土壇4基・溝3条・小穴多数である。これらの遺構は鎌倉時代から室町時代にかけての所産である。遺構の検出状況は、調査区の東側のSD010、西側のSD001がほぼ南北方向に走り、溝に挟まれた状況で他の遺構を検出した。井戸はすべて素堀のもので平面形は不定形であるが円形に近い様相を呈している。土壇は平面・断面形が不定形でありその性格が不明であるがSK007は埋土に藁灰状を含む層を有していることから何らかの祭祀行為が行なわれたことが考えられる。溝はほとんどが調査区外に延びるためその規模、性格は不明であるが、集落を区画するものである可能性がある。小穴は柱穴と認識できず建物の存在は確認できなかった。遺物としては、土師器・須恵器・瓦器・陶器・青磁・白磁器等を検出した。本遺跡はほぼ鎌倉時代に営まれた集落の一部といえる。(角)

IV. 調査の記録

1. 井戸と出土遺物

調査区で3基検出した。いずれも上面の平面はほぼ円形を呈し、素堀のものである。土壇との分類は、埋土の堆積状況及び、断面形態を考慮し行なった。(角)

SE003井戸 (Fig. 5)

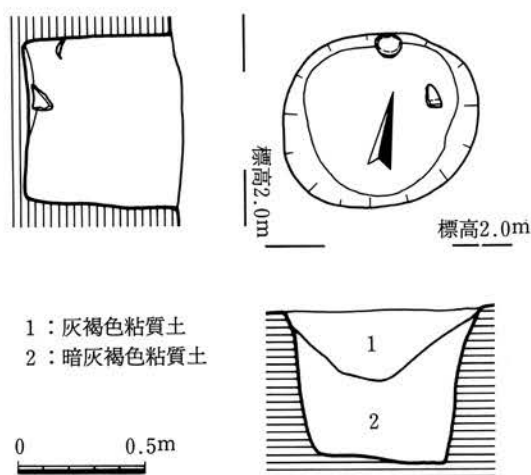


Fig. 5 SE003 井戸 (1/30)

C-2グリットの北部で検出した。素堀の井戸で、SD001と切り合い関係にあり本遺構が後出する。検出面の標高は1.7m～1.75mで、平面形は直径0.7mほどのほぼ円形を

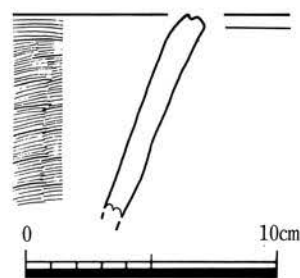


Fig. 6 SE003 出土遺物 (1/3)

1. 井戸と出土遺物

基調とし、深さは0.6mを測り、断面形は逆台形状を呈する。埋土は2層を観察でき、上層から灰褐色土、暗灰色粘質土の順であり、自然堆積による埋没状況を示している。遺物は埋土から土師器片1点が出土している。(角)

SE003出土遺物 (Fig. 6)

土師器鍋ⅢB類〔徳永1990〕の口縁破片である。口縁内端は粘土のナデ上げによって盛り、口縁端部に沈線があるような印象を受ける。口縁端部は横ナデ、内面は横方向の細かいハケ目、外面はカーボンが付着して不明瞭だが縦方向のハケ目がわずかに観察できる。(前田)

SE005井戸 (Fig. 7)

E-3グリットの北東部で検出した。素堀の井戸で、他の遺構との切り合い及び重複関係はない。検出面の標高は1.9m~2.0mである。平面形は直径0.8m~0.9mの不整形な円形を基調としている。底面は確認するまでにいならず、検出した面までの深さは0.85mほどを測る。断面形は長方形に近い逆台形状を呈すると思われ、北側の壁面がやや抉れ込んでいる。埋土は3層に大別される。上層から明灰褐色土、灰褐色土、暗灰色粘質土の順であり、自然堆積による埋没状況を示している。出土遺物はなかった。(角)

SE006井戸 (Fig. 8)

C-5グリットの南部で検出した。素堀の井戸で、他の遺構との切り合い及び重複関係はない。検出面の標高は1.75m前後である。平面形は直径0.9mのほぼ円形を基調としている。検出した面までの深さは0.7mほどを測り、断面形は逆台形状を呈すると思われる。埋土は2層を観

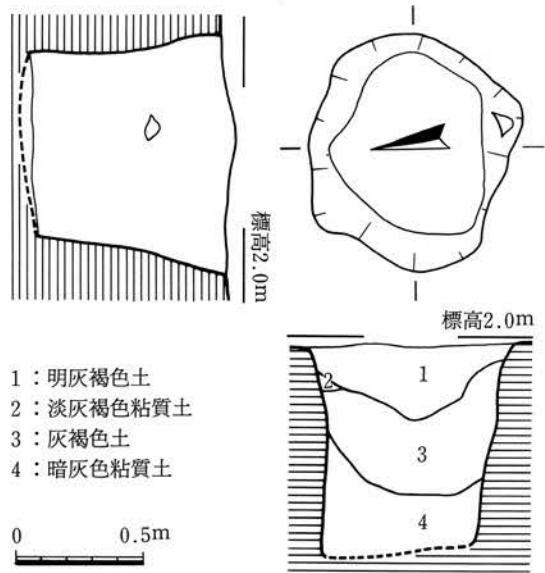


Fig. 7 SE005 井戸 (1/30)

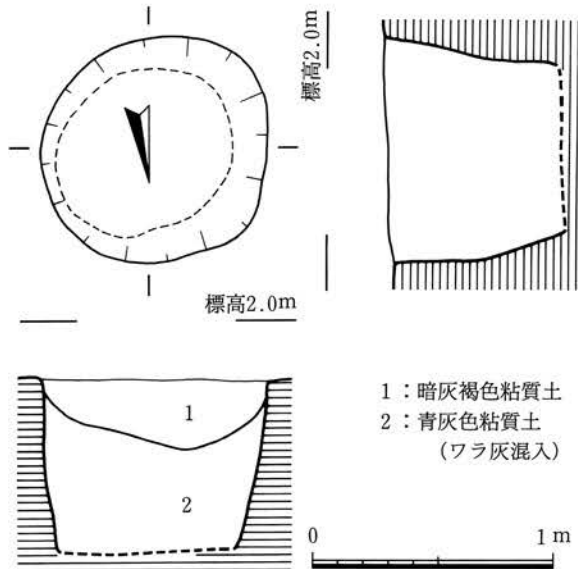


Fig. 8 SE006 井戸 (1/30)

IV. 調査の記録

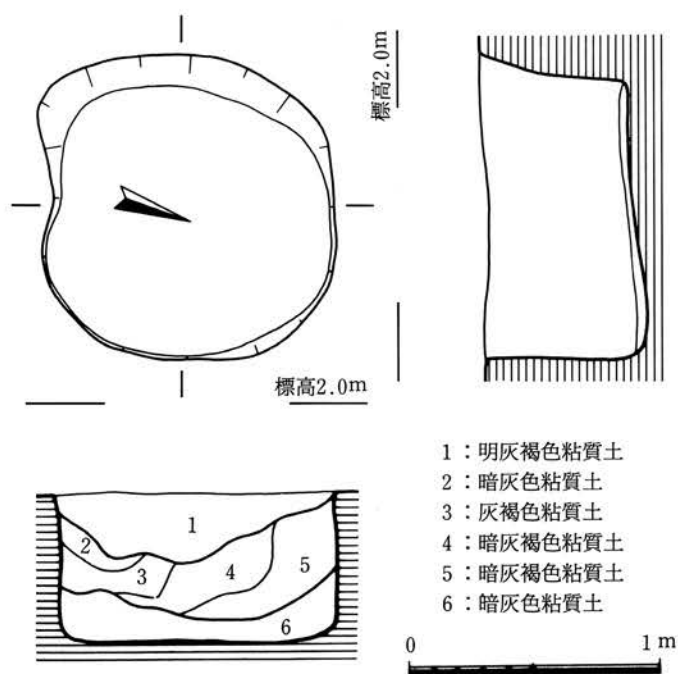


Fig. 9 SK004 土壌 (1/30)

後である。平面形は径1.2mほどの不整形な隅丸正方形を基調としている。深さは0.6m前後で、断面形は逆台形状を呈しているが、壁はきつく立ち上がる。底面はほぼ平坦であるが、東側で若干下がる。埋土は6層に大別でき、自然堆積による埋没状況を示している。遺物は埋土から土師器の杯を検出した。(角)

SK004出土遺物 (Fig. 10)

1は、土師器皿で、小形であるが、皿というより杯というべきか。完存で、口径6.1cm・器高2.3cm・底径4.2cmをはかり、内外面回転ナデ。回転糸切り底である。2・3は、土師器杯で、どちらも回転糸切り底である。2は、復元底径5.4cmをはかり、内外面回転ナデ。3は、復元底径9.0

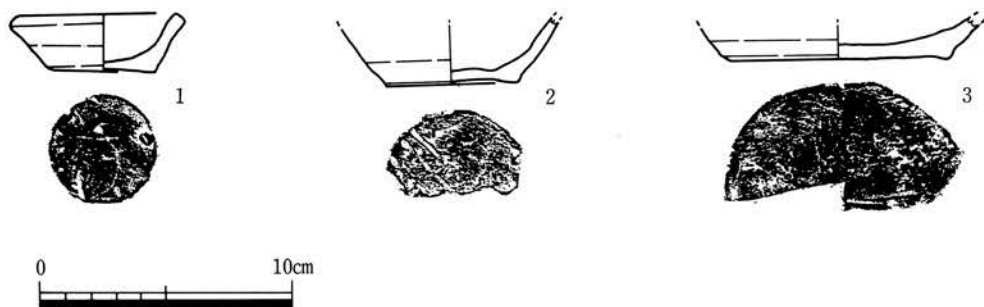


Fig. 10 SK004 出土遺物 (1/3)

察でき、上層は暗灰褐色粘質土で下層は青灰褐色粘質土に藁灰状のものが混在していた。出土遺物はなかった。(角)

2. 土壌と出土遺物

調査区で4基検出した。どれも不定形を呈し、SK007の埋土には藁灰状のものを含む層があり、何らかの祭祀行為が行なわれたことが考えられる。(角)

SK004土壌 (Fig. 9)

D-2グリットの南東部で検出した。SD001と切り合い関係にあり、本遺構が後出する。検出面の標高は1.65m前後

2. 土壌と出土遺物

cm、体部外面は回転ナデ、内底面はナデを加える。(前田)

SK007土壌 (Fig. 11)

C・D-6グリットで検出した。他の遺構との切り合い及び重複関係はない。検出面の標高は2.0mである。平面形は長径1.8m、短径1.4mの不整形な楕円形を呈している。深さは0.4mで断面形はきついレンズ状を呈し、中部に稜線を有する。埋土は7層に大別でき第2層には藁灰状のものを含んでいる。遺物は底面から少し浮いた状態ではほぼ完形の土師器を検出し、埋土から瓦器片を検出した。(角)

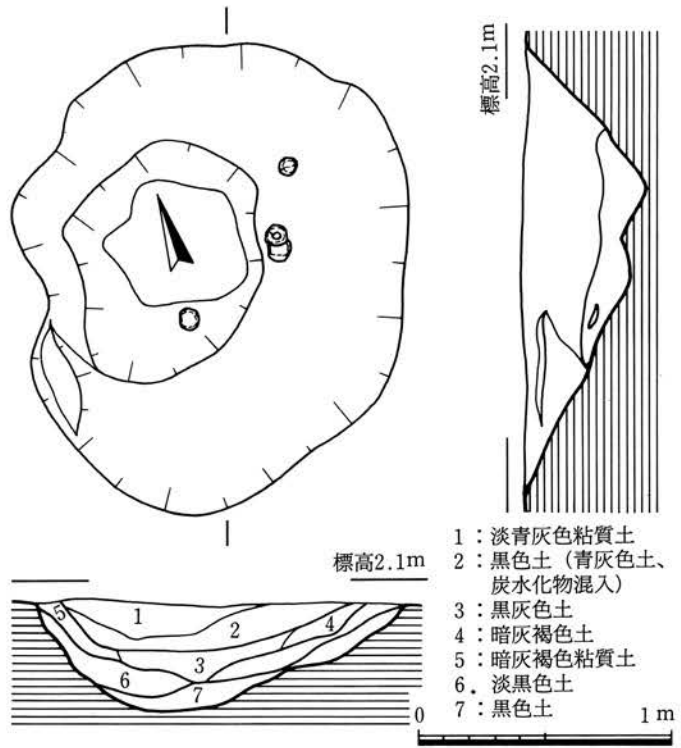


Fig. 11 SK007 土壌 (1/30)

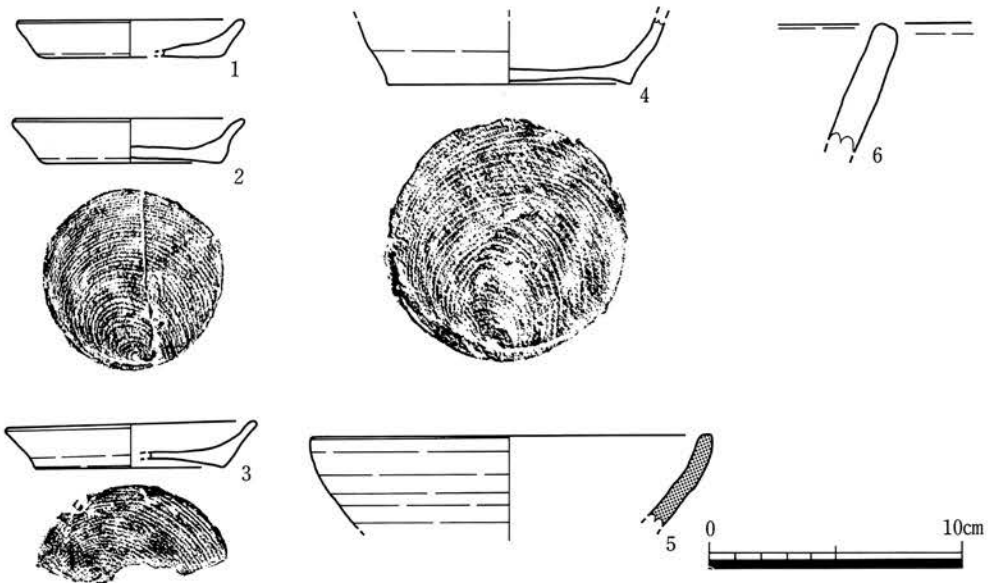


Fig. 12 SK007 出土遺物 (1/3)

IV. 調査の記録

SK007出土遺物 (Fig. 12)

1～3は土師器皿でどれも回転糸切り底である。1は、底部中央以外は完形で、口径8.8cm・器高1.4cm・底径7.4cmをはかり、体部内外面は回転ナデ、内底面はナデを加える。外底面に板目痕がある。2は、完形で、口径9.0cm・器高2.7cm・底径7.2cm、体部内外面は回転ナデ、内底面はナデを加える。3は、完形に近く、口径9.7cm・器高1.8cm・底径7.6cm、体部内外面は回転ナデ、内底面はナデを加える。4は土師器杯で、底径9.7cm、体部内外面は回転ナデ、内底面はナデを加える。5は瓦器椀で、復元口径15.8cm、固い焼きで、口縁外端に環状黒班があり、体部外面はきつい回転ナデ、内面はコテあて痕がかすかに残る。6は土師器鉢で、胎土に砂粒を多量に含み、淡赤褐色を呈し、内面調整不明、外面に斜方向のハケ目がかすかに残る。(前田)

SK008土壌 (Fig. 13)

D・E-6グリットで検出した。他の遺構との切り合い及び重複関係はない。検出面の標高は2.0mほどである。平面形は長径1.8m、短径1.5mの不整形な楕円形状を呈している。深さは0.8m～0.9mを測り、底面はほぼ平坦であるが東側にやや下がる。壁は西側で段を有する他はきつく立ち上がる。埋土は灰褐色に地山の黄灰色粘質土が混在したものを基調としている。出土遺物はない。(角)

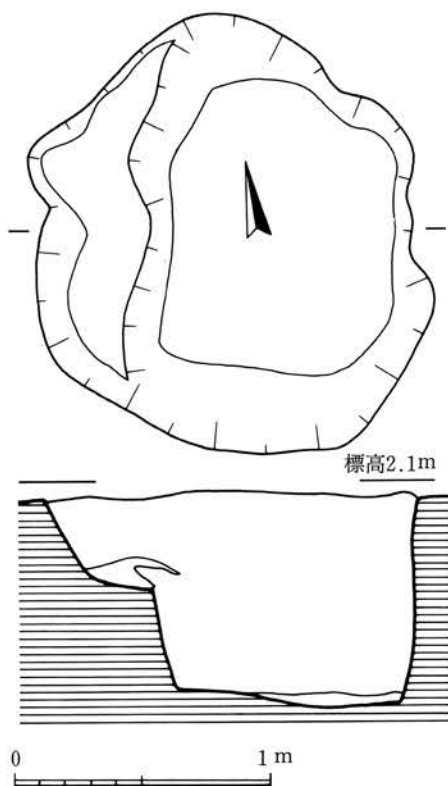


Fig. 13 SK008 土壌 (1/30)

SK011土壌 (Fig. 14)

B・C-6・7グリットで検出した。SD010と切り合い関係にあり本遺構が後出する。2基の土壌が切りあっているかに思われたが確認できなかった。検出面の標高は2.0mほどである。平面形は長軸4.3m、短軸3.0mの不整形を呈している。深さは1.1m～1.2mを測る。底面はほぼ平坦であるが北側でやや高まり、0.2mほど掘り込んでいる。壁はややきつめに立ち上がるが南と西側に段を2段有する。埋土は自然堆積による埋没状況を示していた。遺物は埋土から土師器、瓦器、須恵器、青白磁器を検出した。(角)

SK011出土遺物 (Fig. 15・16)

1～4は土師器皿で、どれも回転糸切り底である。1は、復元口径8.6cm・器高1.7cm・復元口径7.0cmをはかり、体部内外面は回転ナデ、内底面はナデを加える。2は、復元口径9.2cm・器高1.7cm・復元底径7.8cm、体部内外面は回転ナデ、内底面は

2. 土壌と出土遺物

ナデを加える。3は、復元口径9.2cm・器高1.4cm・復元底径7.1cm、体部内外面は回転ナデ、内底面はナデを加える。4は、径の復元に不安があるが、復元口径9.4cm・器高2.7cm・復元底径5.4cm、体部内外面・内底面回転ナデ。5・6は土師器杯でどちらも回転糸切り底。5は、復元口径12.2cm・器高3.0cm・復元底径8.2cmをはかり、体部内外面・内底面回転ナデである。6は、径の復元にやや不安があるが復元口径14.8cm・器高3.0cm・復元底径12.8cm、体部内外面回転ナデ。7・8は青磁椀。7は、龍泉窯系椀I-5bc

類〔森田・横田1978〕で、復元口径16.8cm。8は龍泉窯系I-4類か。9・10は白磁皿IX類である。10は復元底径7.0cm。11は白磁椀IX類、復元口径12.8cm。12は東播系須恵器捏鉢で、内外面回転ナデ。13は須恵器瓶で、軟質の焼成で、外面は斜方向のハケ目の後格子目タタキ、内面はヘラ状工具によるナデ研磨。14は、耳付きの土師器鍋口縁部破片で、暗赤黄褐色を呈し、内面横ナデ、外面は横ナデに指押さえを加える。15は瓦器湯釜の罅部破片、内外面横ナデ。16は滑石製石鍋。17は土師器鍋III B類〔徳永1990〕で、復元口径41.0cmをはかり、口縁端部は横ナデ、外面上部は横～斜方向のハケ目、下部は指押さえ、内面は横方向のハケ目の後ナデ。(前田)

3. 溝と出土遺物

3条の溝を検出した。調査区が狭いためその全容は検出できなかったがSD001とSD010は集落を区画する溝である可能性が考えられる。(角)

SD001溝 (Fig. 17)

調査区の西側、B-1・2からE-2・3グリットにかけて検出した。SD002、SE003、SK004と切り合い関係にあり、SD002との前後関係は不明瞭であるが他の遺構とは本遺構が前出する。やや西に振れる溝である。検出面の標高は1.8m～1.9mほどである。幅は4.5m前後、深さは0.2m～0.3mを測る。底面はほぼ平坦であるがD-2グリット付近で島状の高まりを有する。壁は

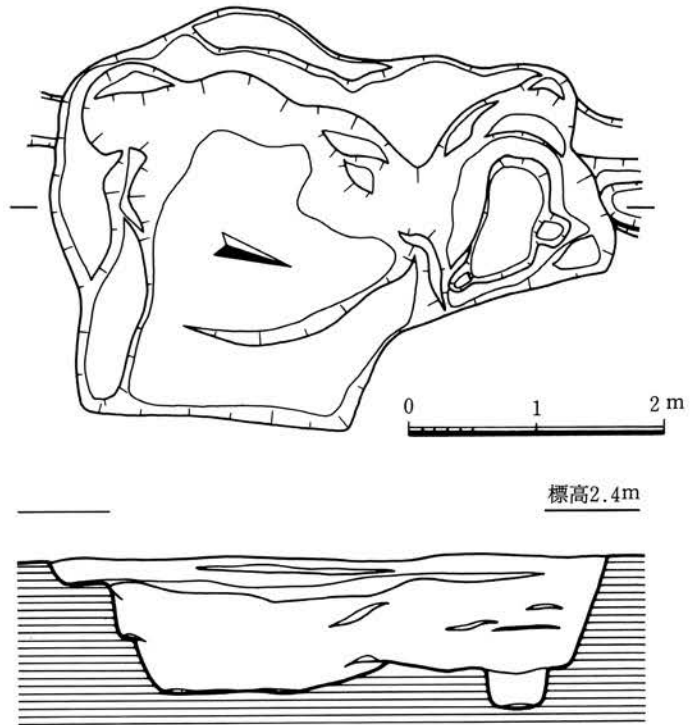


Fig. 14 SK011 土壌 (1/60)

IV. 調査の記録

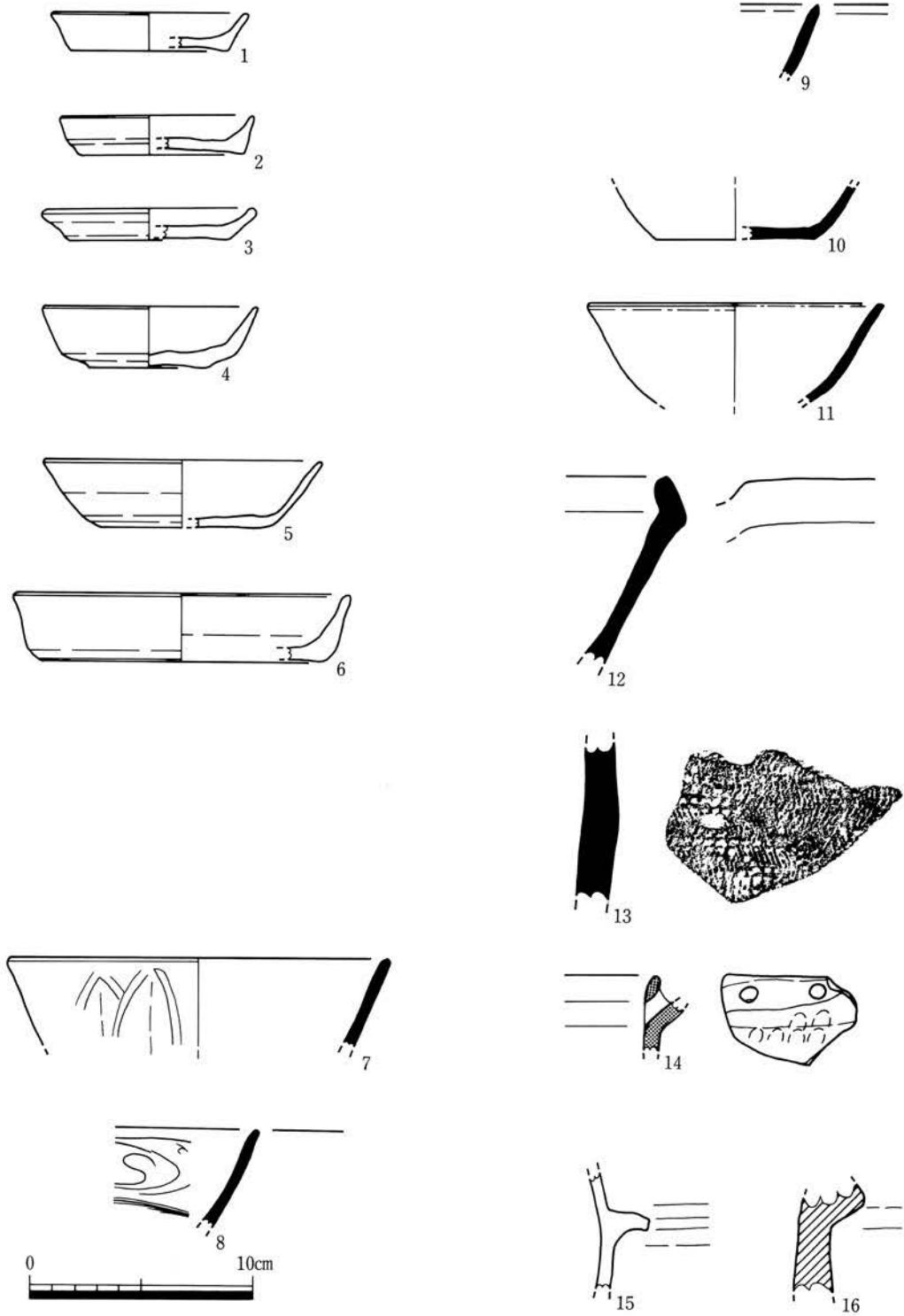


Fig. 15 SK011 土壙 (1/30)

3. 溝と出土遺物

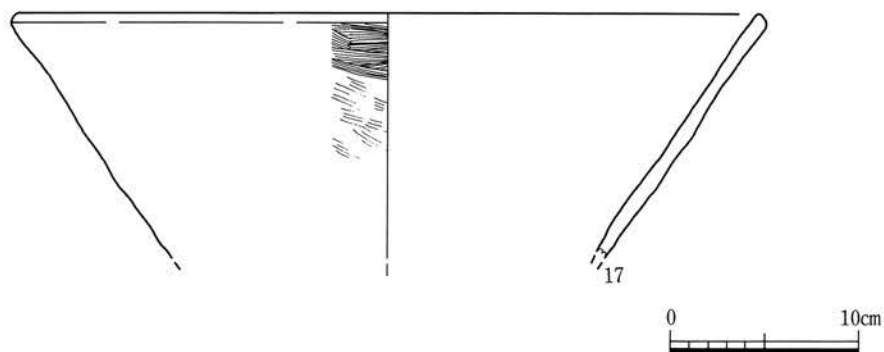


Fig. 16 SK011 出土遺物 2 (1/4)

緩やかに立ち上がる。埋土は11層に分層でき自然堆積による埋没状況を示している。遺物は埋土から土師器、瓦器、須恵器、青白磁器等を検出した。(角)

SD001出土遺物 (Fig. 18~25)

1~17は土師器皿。どれも回転糸切り底で、体部内外面と内底面は回転ナデ。1は、復元口径7.6cm・器高1.3cm・底径6.0cmをはかり、内底面にナデを加える。2は、復元口径7.7cm・器高1.5cm・復元底径6.3cm、外底面には板目が残り、内底面にはナデを加える。3は、復元口径7.7cm・器高1.5cm・復元底径6.1cmをはかる。4は、復元口径7.9cm・器高1.5cm・復元底径7.0cm、内底面にナデを加える。5は、口径8.1cm・器高1.4cm・底径6.3cm、内底面にナデを加える。6は、回転ナデのくぼみで底部外端が張り出し、復元口径8.0cm・器高1.4cm・復元底径7.4cmをはかる。7は、復元口径8.0cm・器高1.7cm・底径6.0cm、内底面にナデを加える。8は、完形で口径8.0cm・器高1.3cm・底径7.2cm、内底面にナデを加える。9は、復元口径8.2cm・器高1.5cm・底径6.3cmをはかる。10は、復元口径8.4cm・器高1.4cm・底径6.9cm、内底面にナデを加える。11は、完形で口径8.6cm・器高1.4cm・底径7.3cm、内底面にナデを加える。12は、復元口径8.6cm・器高1.6cm・復元底径6.9cmをはかる。13は、回転ナデのくぼみで底部外端が張り出し、復元口径8.6cm・器高1.6cm・復元底径7.4cmをはかる。14は、復元口径8.3cm・器高1.4cm・底径7.2cm、内底面にナデを加える。15は、復元口径9.0cm・器高1.5cm・復元底径7.2cmをはかる。16は、復元口径9.6cm・器高1.1cm・復元底径7.9cm、内底面にナデを加える。17は、復元口径9.6cm・器高1.4cm・復元口径7.8cmをはかる。18~28は土師器杯。どれも回転糸切り底で、体部内外面と内底面は回転ナデ。18は、回転ナデのくぼみで底部外端が張り出し、復元口径10.6cm・器高2.9cm・復元底径8.0cmをはかる。19は、完形に近く口径11.7cm・器高2.9cm・底径8.6cmをはかる。20は、復元口径12.1cm・器高2.6cm・底径8.8cm、内底面にナデを加える。21は、完形に近く口径12.1cm・器高2.8cm・底径10.0cm、内底面にナデを加える。22は、復元口径12.2cm・器高2.7cm・復元底径8.6cmをはかる。23は、回転ナデのくぼみで底部外端が張り出し、ほぼ完

IV. 調査の記録

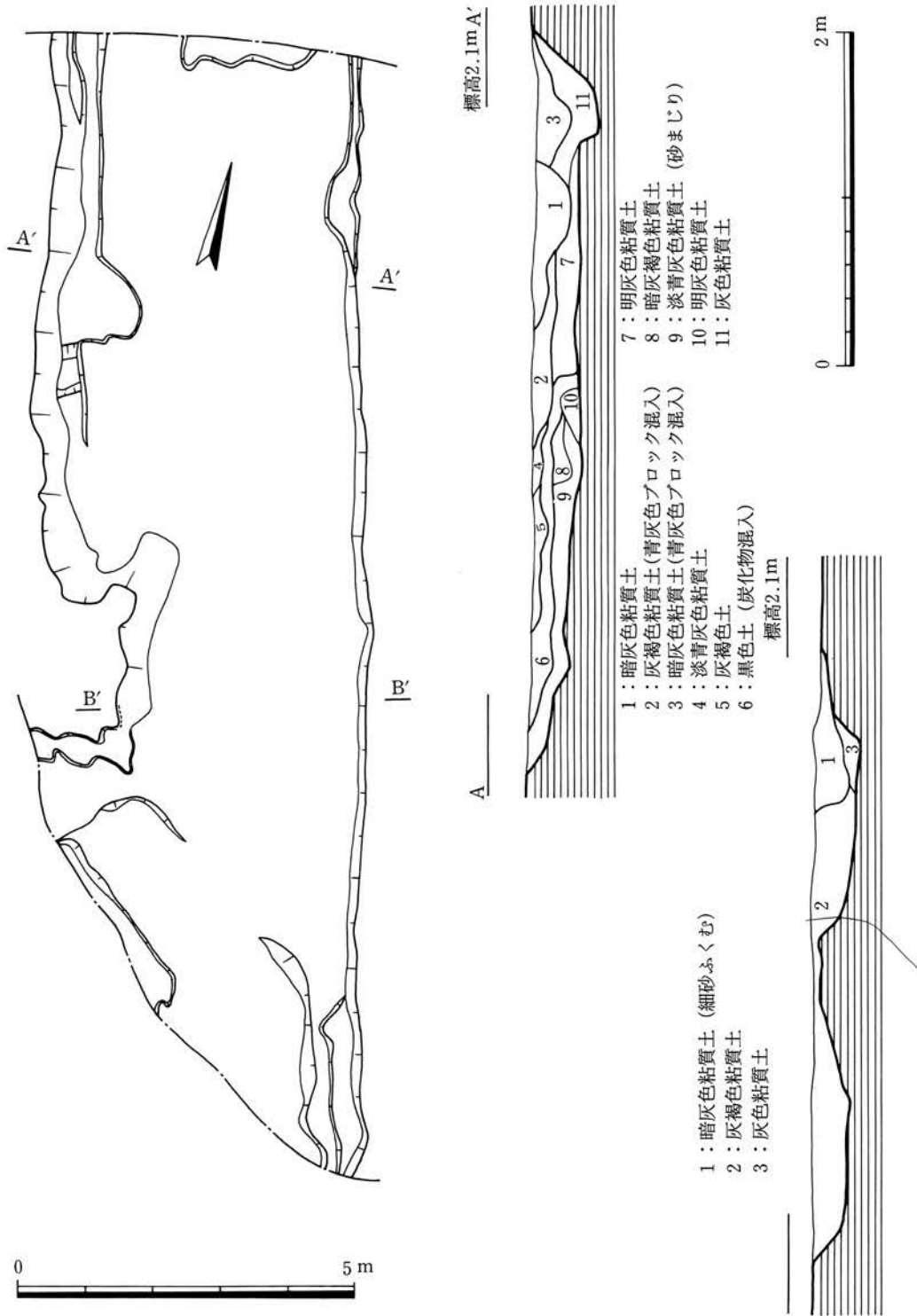


Fig. 17 SD001 溝 (1/100 • 1/40)

3. 溝と出土遺物

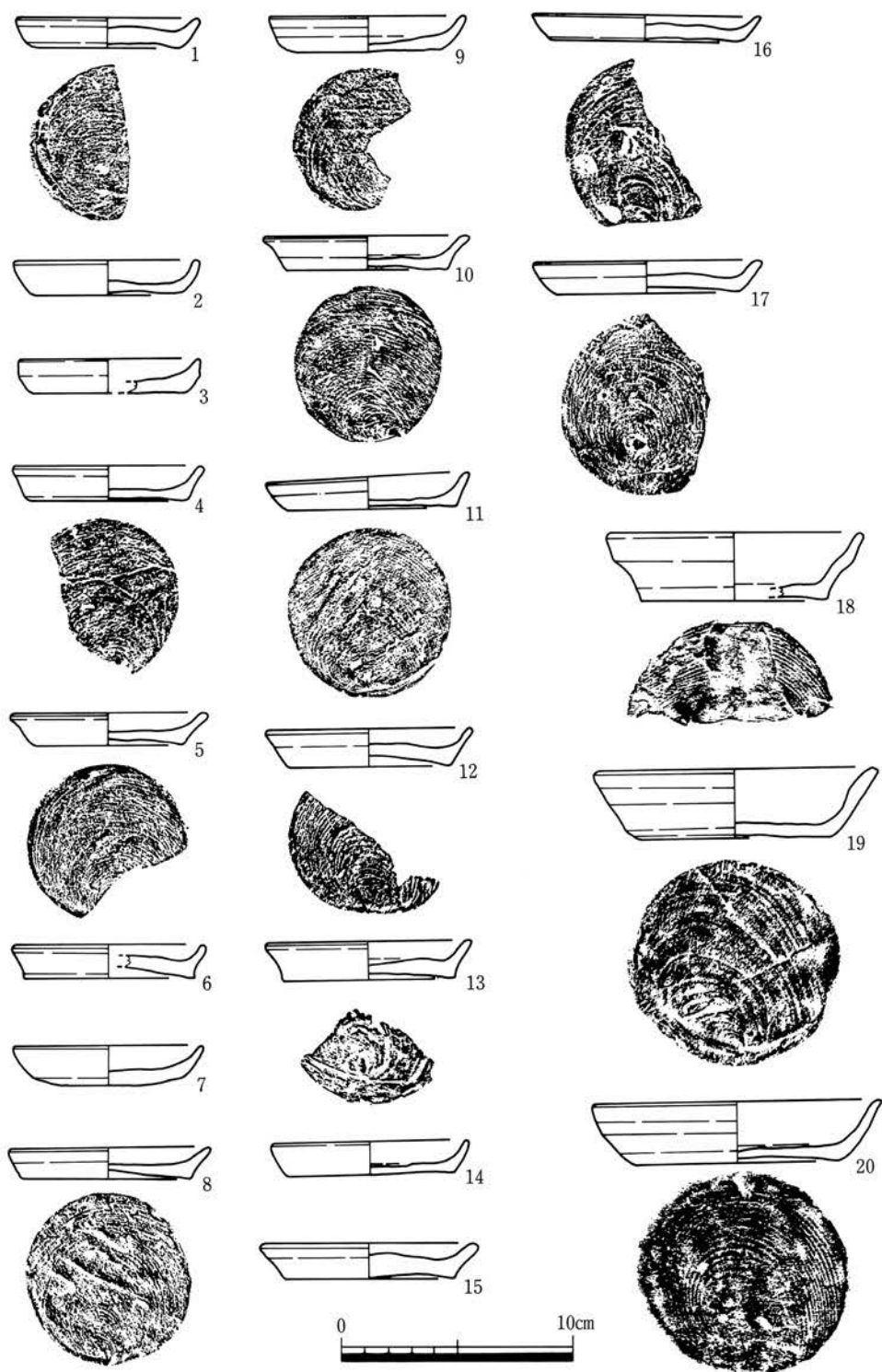


Fig. 18 SD001 出土遺物 1 (1/3)

IV. 調査の記録

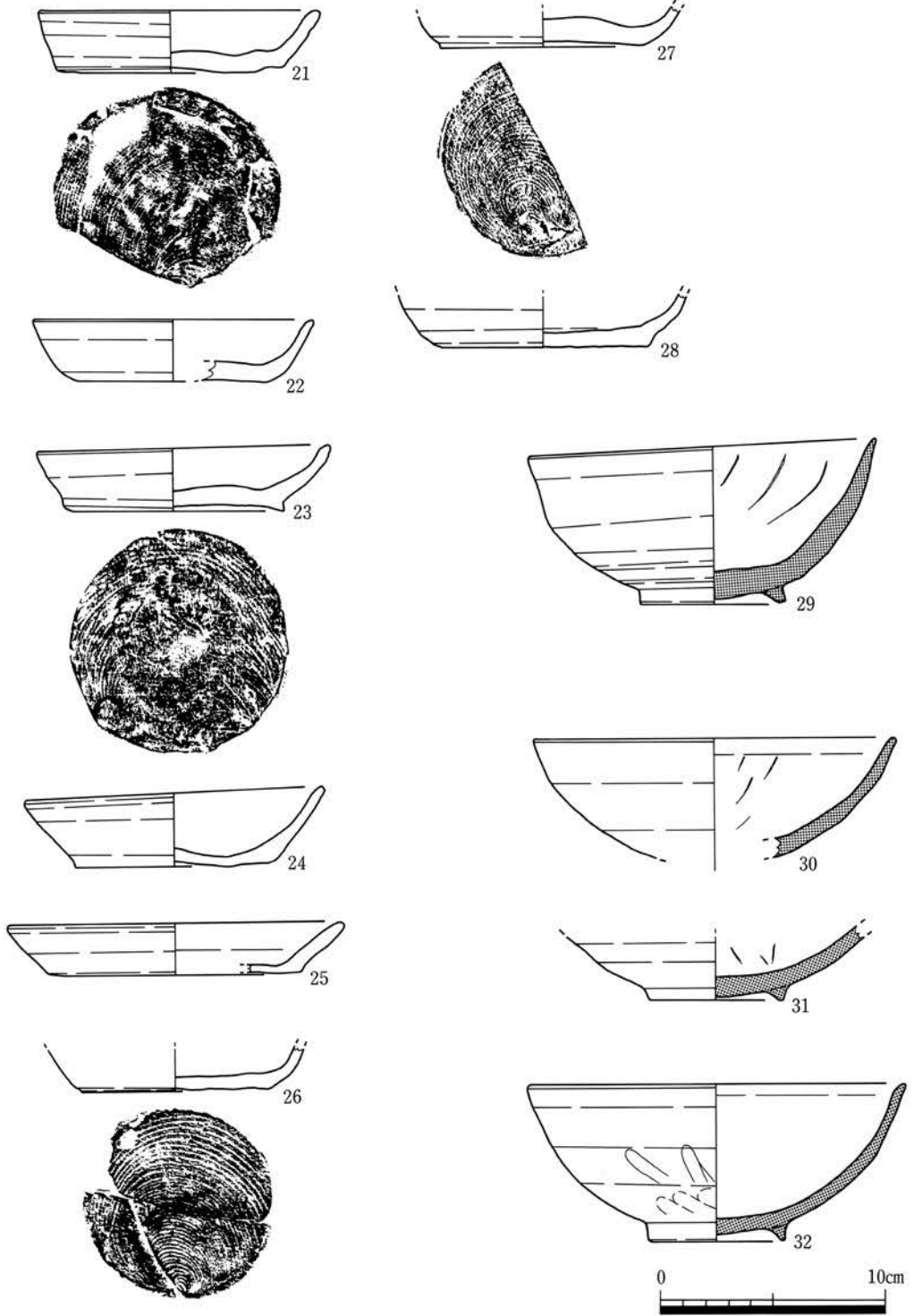


Fig. 19 SD001 出土遺物 2 (1/3)

3. 溝と出土遺物

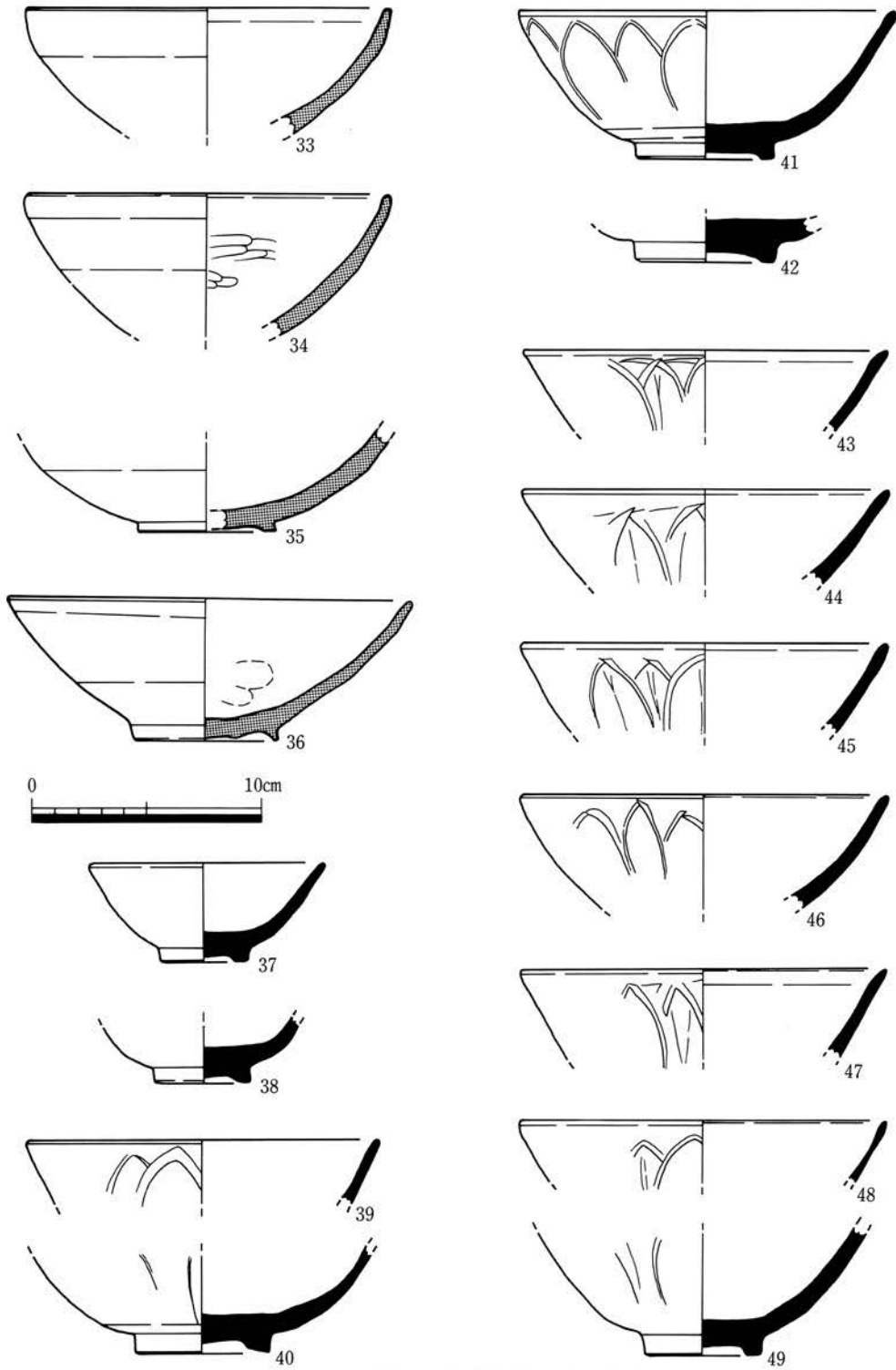


Fig. 20 SD001 出土遺物 3 (1/3)

IV. 調査の記録

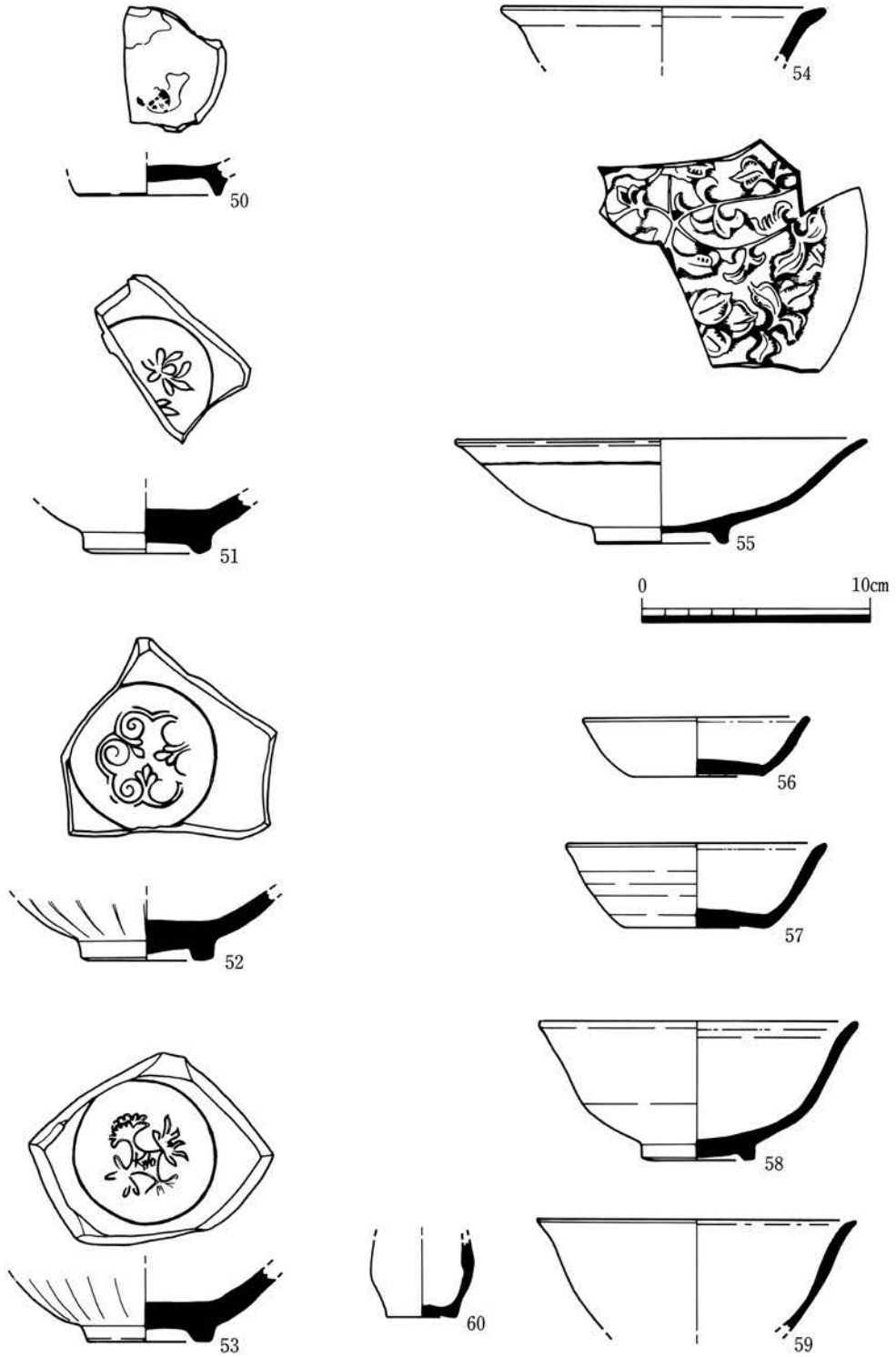


Fig. 21 SD001 出土遺物 4 (1/3)

3. 溝と出土遺物

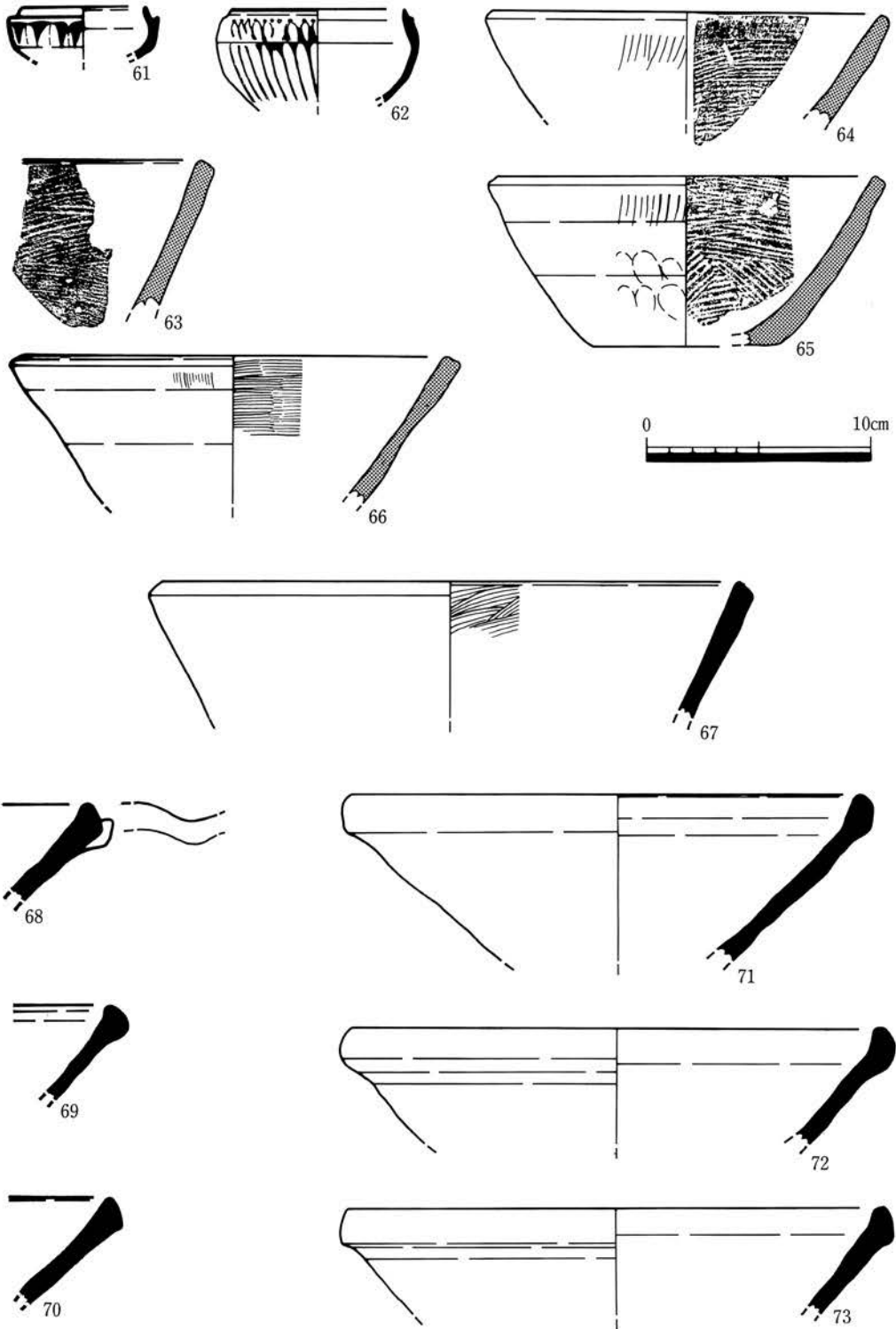


Fig. 22 SD001 出土遺物 5 (1/3)

IV. 調査の記録

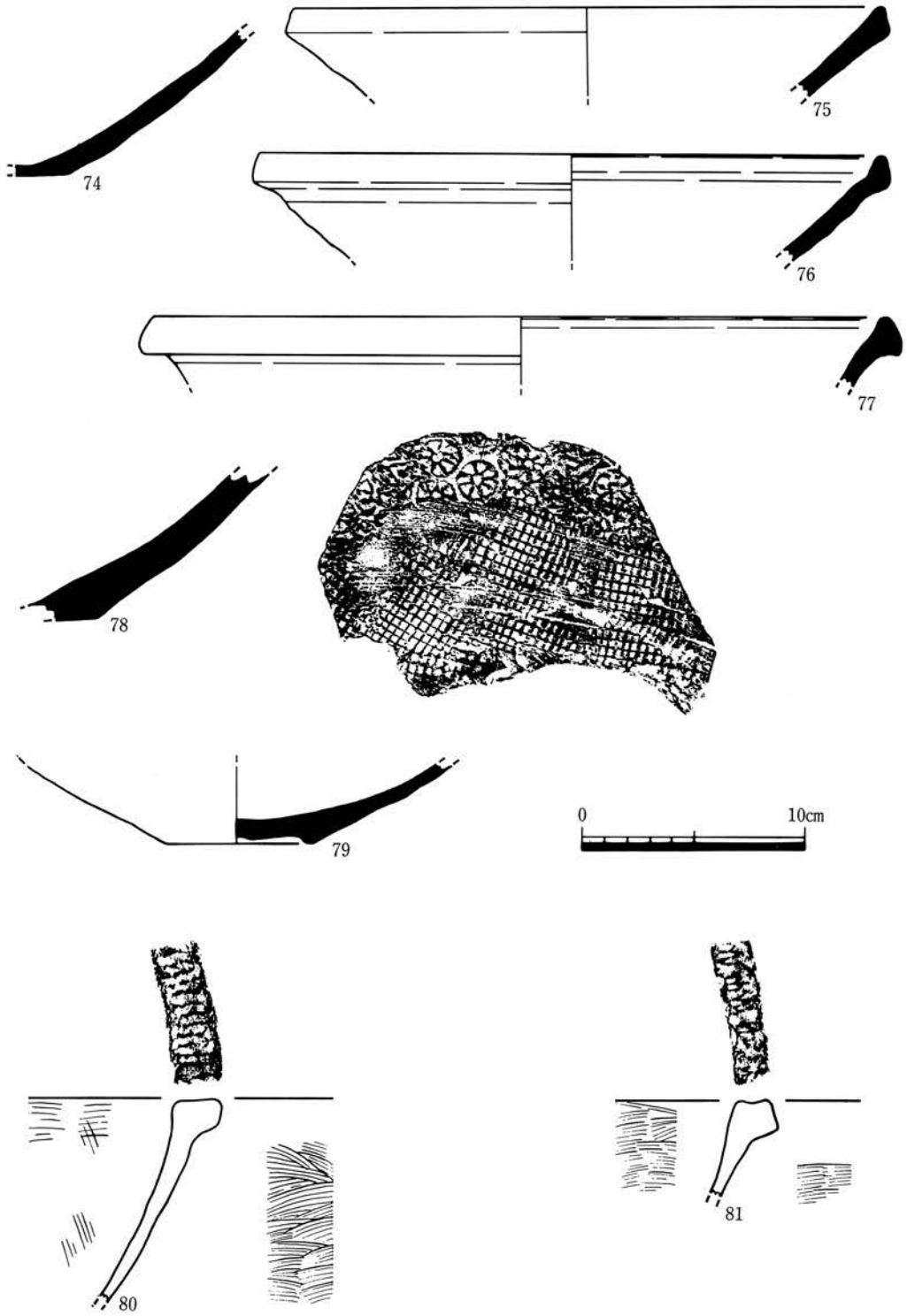


Fig. 23 SD001 出土遺物 6 (1/3)

3. 溝と出土遺物

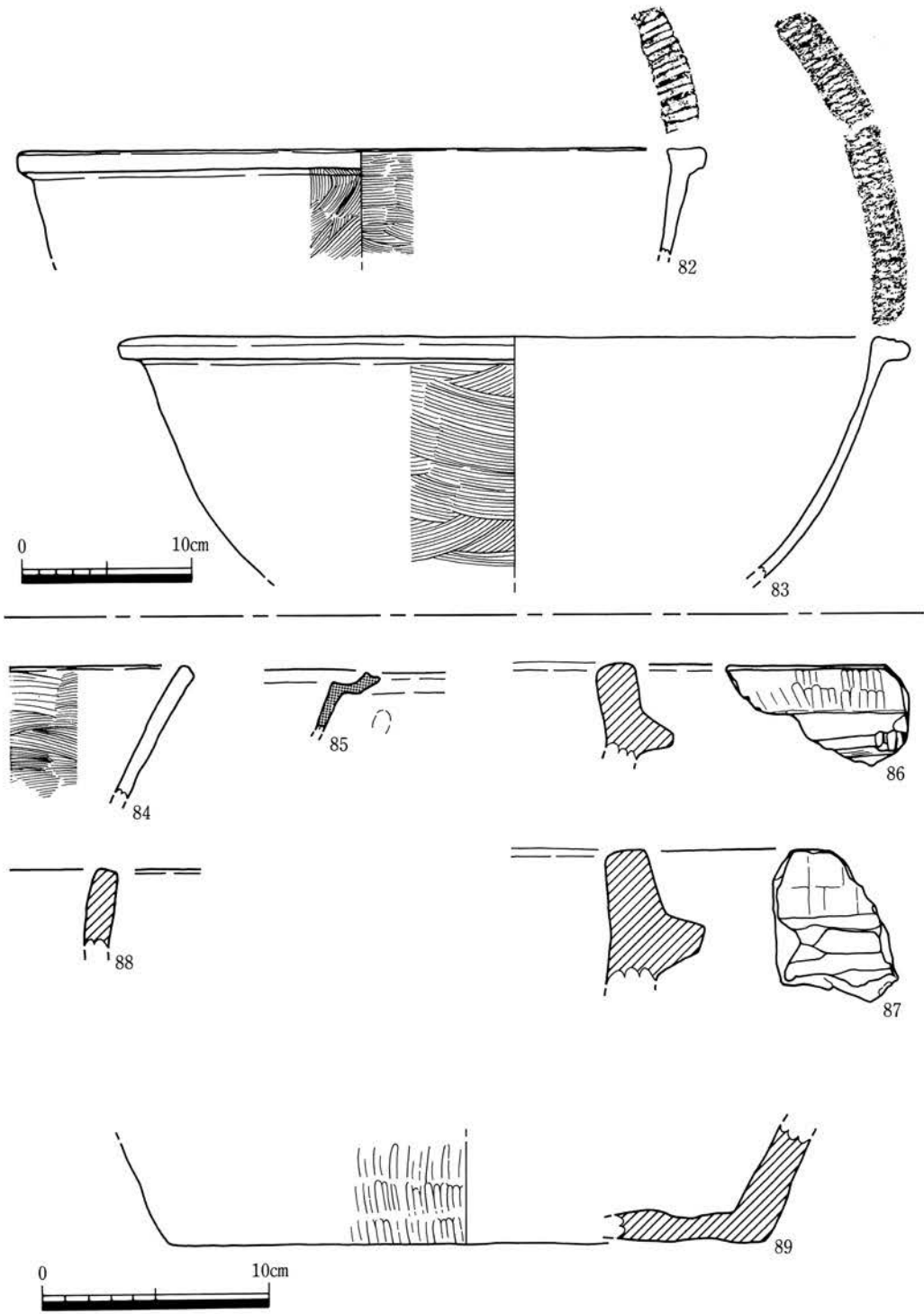


Fig. 24 SD001 出土遺物 7 (1/3・1/4)

IV. 調査の記録

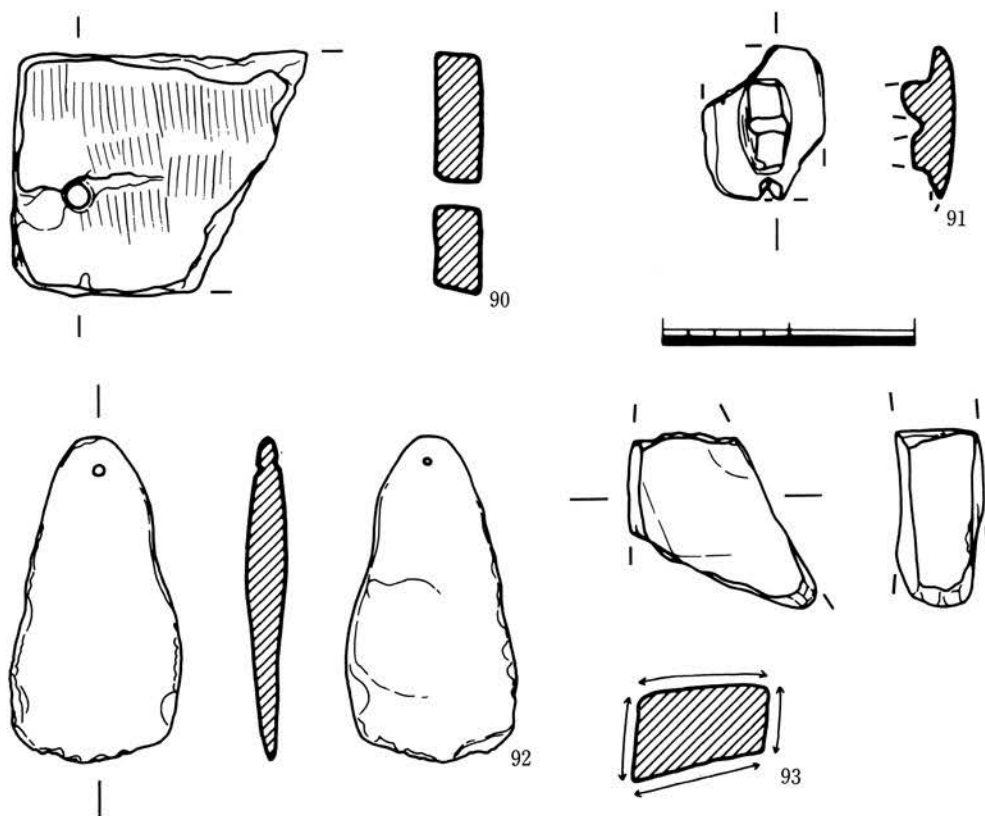


Fig. 25 SD001 出土遺物 8 (1/3)

存で口径12.7cm・器高2.9cm・底径9.8cmをはかり、内底部にナデを加える。24は、完存に近く口径13.0cm・器高3.4cm・底径8.8cmをはかり、外底面に板目が残り、内底面にはナデを加える。25は、復元口径14.6cm・器高2.8cm・復元底径13.2cmをはかり、外底面に板目が残る。26は、底径8.4cmをはかり、内底面にナデを加える。27は、復元底径9.2cm、内底面にナデを加える。28は、底径9.6cm、内底面にナデを加える。29～36は瓦器椀。どれも口縁部外面に環状黒斑がある。29は、復元口径15.2cm・器高6.9cm・復元高台径6.4cmをはかる。内面はコテあて痕、外面上部は回転ヘラ削り、下部は指押さえ。30は、復元口径15.8cm、内面はコテあて痕、外面は回転ナデ。31は、高台径5.9cm、内面はコテあて痕、外面は回転ナデ。32は、復元口径16.5cm・器高6.9cm・高台径6.1cm、内面は調整不明、外面上部は斜～横方向のヘラミガキ、下部は指押さえ。33は、復元口径15.4cm、内面上部回転ナデ、下部コテあて痕、外面回転ナデ。34は、復元口径15.5cm、内面上部回転ナデ、下部横方向のヘラミガキ、外面回転ナデ。35は、復元高台径6.0cm、内面はヘラ状工具による横方向のナデ研磨、外面回転ナデ。36は、口径17.4cm・器高6.1cm・高台径6.2cm、内面上部は不明瞭な横～斜方向のヘラミガキ、下部指押さえ、外面上部回転ナデ、下部指押さえ。37～54は龍泉窯青磁 [森田・横田1978]。37・38は小椀 I—4 類。37は、

3. 溝と出土遺物

緑褐色を呈し復元口径10.0cm・器高4.2cm・高台径3.8cm。38は、緑青灰色を呈し高台径4.1cmをはかる。39～42はI-5a類。39は、緑灰色を呈し復元口径15.0cm。40は、緑褐色を呈し高台径5.8cm。41は、緑褐色を呈し口径16.2cm・器高6.4cm・高台径6.0cm。42は、緑灰色を呈し高台径6.2cm。43～53はI-5bc類。43は、緑灰色を呈し復元口径15.7cm。44は、淡緑青灰色を呈し復元口径15.7cm。45は、緑灰色を呈し復元口径15.7cm。46は、白緑灰色を呈し復元口径15.7cm。47は、緑灰色を呈し復元口径15.7cm。48は、緑灰色を呈し復元口径15.9cm。49は、緑灰色を呈し高台径5.1cm。50は、緑灰色を呈し復元高台径6.4cm、内底面に魚のようなものを浮き彫りにしている。51は、緑灰色を呈し復元高台径5.5cm。52は、緑灰色を呈し高台径5.8cm。53は、淡緑灰色を呈し高台径5.5cmをはかる。54は杯III-2類、明淡緑灰色を呈し、復元口径13.0cmをはかる。55は不明青磁の高台付皿である。淡緑灰色を呈し、復元口径17.7cm・器高4.5cm・高台径5.8cmをはかる。56～60は白磁。56・57は皿IX類で、ともに暗白灰色を呈する。56は口径9.5cm・器高2.5cm・底径5.7cm、57は復元口径11.0cm・器高3.7cm・底径6.1cmをはかる。58・59は椀IX類で、ともに暗白灰色を呈する。58は復元口径13.7cm・器高6.0cm・高台径4.9cm、59は復元口径13.8cmをはかる。60は小壺で薬壺のようなものか。底径2.1cmをはかり、外底面と外面底部付近は釉がかかっている。61・62は青白磁合子で、どちらも白青灰色を呈し体部外面に細かい蓮弁文を施し、受部と体部外面下部には施釉されていない。61は復元口径5.5cm、62は復元口径7.6cmをはかる。63～66は瓦器捏鉢で、口縁端部は横ナデ、内面は横～斜方向のハケ目、内面は縦方向のハケ目と指押さえ。63・66の口縁端部は横ナデによる沈線状のくぼみがめぐる。64は復元口径17.3cm、65は復元口径16.7cm・器高7.5cm・復元底径8.3cm、66は復元口径18.6cmをはかる。67～77は須恵器捏鉢。67は産地不明で在地のものか。口縁端部から外面横ナデ、内面は横方向のハケ目で、復元口径25.4cmをはかる。68～77は東播系須恵器の捏鉢である。どれも体部内外面横ナデ。71は復元口径21.4cm、72は復元口径23.4cm、73は復元口径23.6cm、75は復元口径26.0cm、76は復元口径27.6cm、77は復元口径32.4cmをはかる。74は底部破片である。78は須恵器瓶、底部付近の破片で、内面はナデ、外面は上部に印花文、下部は格子タタキ目である。79は陶器の壺、暗赤褐色を呈し、褐釉である。外底面は削り取っており、内外面回転ナデ。底径6.8cmをはかる。80～84は土師器鍋。80～83は鍋II類〔徳永1990〕である。体部内面は横方向のハケ目にナデを加え、外面は横～斜方向のハケ目。80・81・83は口縁上端に回転縄文を施し、82は茎状の原体で沈線を加えている。82は復元口径35.6cm、83は復元口径42.0cmをはかる。84は鍋III類で、口縁端部横ナデ、内面横方向のハケ目、外面不明瞭な縦方向のハケ目。85は瓦器の鍋で、搬入品か。焼成は良好、内面と外面上部横ナデ、外面下部に指押さえ。86～89は滑石製石鍋。90～93は石製品。90・91は石鍋の転用品と思われる。91は<パレン状石製品>と俗称していて、佐賀平野の広い範囲の中世前半期の遺跡から出土するが、用途・機能は不明。92は石材不明で、打製石斧のような印象を受けるが、上部の貫通していない穿孔は鉄器によるもの

IV. 調査の記録

と思われる。なにかの未製品か。93は砂岩系石材の砥石破片で、4面を使用している。(前田)

SD002溝

B・C-1グリットで検出した。前述したとおりSD001と切り合い関係にあるが前後関係は不明瞭である。検出面の標高は1.8m～1.9mほどである。幅は1.0m前後、深さは0.1mほどを測る。底面は平坦で壁は緩やかに立ち上がる。埋土は単層で灰褐色土に黄灰色粘質土が混在したものである。遺物は埋土から須恵器、陶器、青磁器が出土した。

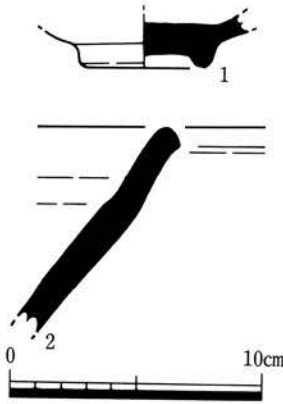


Fig. 26 SD002出土遺物(1/3)

SD002出土遺物 (Fig. 26)

1は、龍泉窯青磁碗I-5bc類[森田・横田1978]である。白緑灰色を呈し高台径4.8cmをはかる。2は、暗赤褐色を呈する無釉陶器の鉢と思われる。内外面回転ナデである。(前田)

SD010溝 (Fig. 27)

調査区の東側、A-6からE-7グリットにかけて検出した。SK011と切り合い関係にあり、本遺構が前出する。やや西に振れる南北方向に走る溝であり、D-6グリットの北東部に陸橋と思われる部分を有する。検出面の標高は2.0mほどである。幅は0.4m～0.8mで深さは0.4m～0.6mほどを測る。底面は幅0.2m～0.25m程で、ほぼ平坦である。断面形は不整形な逆台形状及びU字型を呈している。埋土は4～5層に分層でき自然堆積による埋没状況を示しているが、藁灰状のものを含む層を有する。遺物は埋土から土師器、瓦器、陶器を検出した。(角)

SD010出土遺物 (Fig. 28)

1は土師器皿で、回転糸切り底、体部内外面回転ナデ、内底面にナデ、復元口径8.8cm・器高1.4cm・底径6.9cm。2は土師器杯で、回転糸切り底で、体部内外面回転ナデ、復元口径12.5cm・器高2.7cm・底径9.4cm。3は瓦器の湯釜、口縁部内外面横ナデ、体部内面ナデ、外面ハケ目に印花文を加える。4は土師器の火鉢、内外面横ナデ、外面に印花文を施す。5は土師器鍋II類[徳永1990]の底部破片、内面横方向のハケ目、外面調整不明。6は瓦器、内面ヘラ状工具によるナデ研磨、外面横ナデ。7は陶器の捏鉢、暗赤褐色を呈し、内外面回転ナデ、口縁外面一部に指頭痕が残る。復元口径26.0cm・器高10.0cm・復元底径16.1cmをはかる。(前田)

V. 小 結

今回の調査の結果、観音遺跡は鎌倉時代から室町時代に営まれた集落の一部であることがわかった。本遺跡は元来、周知の埋蔵文化財包蔵地外とされていた地点で新発見された遺跡である。当地には「屋敷の内」という地元呼称が残っていた。このような「屋敷」という呼称が残存し

3. 溝と出土遺物

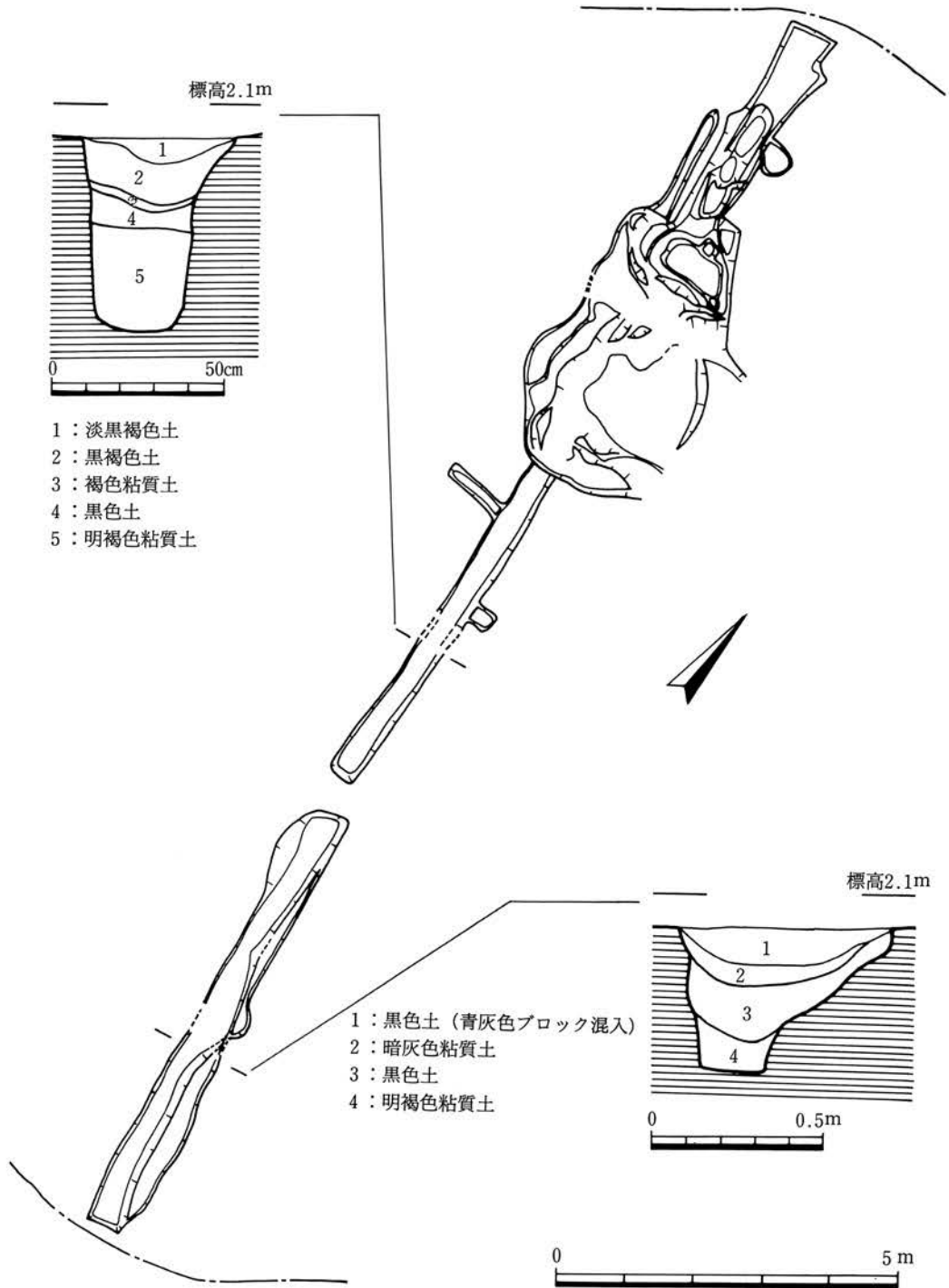


Fig. 27 SD010 溝 (1/100・1/20)

V. 小 結

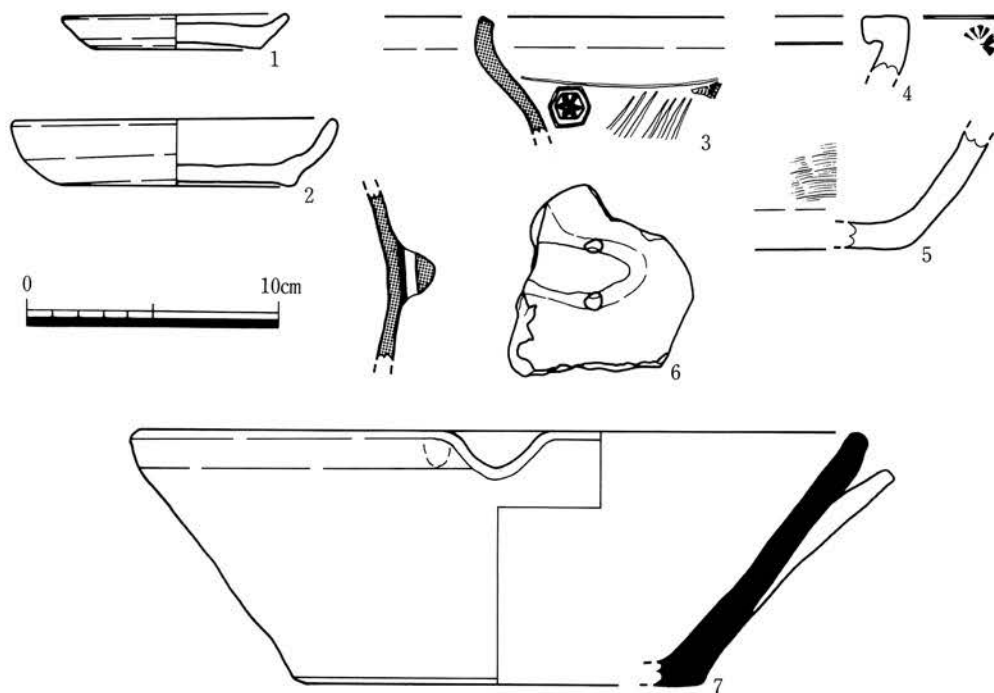


Fig. 28 SD010 出土遺物 (1/3)

ている地点で新たに中世集落遺跡が発見されるケースが近年増加している。平成2年度に調査を実施した北川副町に所在する梅屋敷遺跡，平成4年度に調査を実施した鍋島町に所在する大西屋敷遺跡，平成5年度に調査予定の兵庫町に所在するウー（大）屋敷遺跡等がその例である。

このように地元に残っている呼称が当地に何らかの歴史性が存在していることをうかがい知ることができ，今回の調査で検出した遺構，遺物はそれを証明するものであった。(角)

VI. 観音遺跡出土容器類の定量分析

観音遺跡1区で出土した容器類について本村遺跡の方法〔徳永・宮武1991〕によって定量化（数量化）を行い，その分析結果との比較を試みた。

資料 観音遺跡1区の出土遺物のうち，ごく少数の奈良時代土師器・須恵器・江戸時代染付と，石製品を除いたすべての容器類破片を対象とする。同一遺構内での口縁部破片については接合作業を完了（各遺構間における接合関係は考慮していない）した。口縁部破片以外の接合作業は行ってはいるが完全ではない。

方法 容器類破片を各遺構ごとに分類し集計した。分類は，先ず種別（土師器・瓦器・須恵器・陶器・青磁・白磁・青白磁・滑石製石鍋）で行い，次いで器種（皿・杯・碗・鍋・湯釜・捏鉢・瓶・壺・合子）ごとに分類し，総破片数と口縁部破片数を集計した。その後，形態類

VI. 観音遺跡出土容器類の定量分析

Tab. 1 観音遺跡1区出土容器類分類計算表 [数値は破片数, ()は口縁部破片数]

分類単位	SD001	SD002	SE003	SK004	SK007	SD010	SK011	表採	合計
土師器	1014(144)	9(2)	1(1)	19(3)	38(5)	36(3)	215(23)	12(3)	1344(184)
皿・杯	853(126)	9(2)	×	17(3)	30(5)	8(3)	129(17)	9(2)	1055(158)
鍋Ⅱ類	55(12)	×	×	×	×	7	23	×	85(12)
鍋Ⅲ類	10(6)	×	1(1)	1	×	12	17(6)	3(1)	44(14)
捏鉢	2	×	×	×	1	2	1	×	6
湯釜	×	×	×	×	×	×	1	×	1
その他・不明	94	×	×	1	7	7	44	×	153
瓦器	49(17)	×	×	1	2(1)	3(2)	5(1)	3	63(21)
椀	32(12)	×	×	×	2(1)	1	2	3	40(13)
捏鉢	15(4)	×	×	1	×	×	2	×	18(4)
鍋	1(1)	×	×	×	×	×	1(1)	×	2(2)
湯釜	×	×	×	×	×	2(2)	×	×	2(2)
瓶	1	×	×	×	×	×	×	×	1
須恵器	42(17)	3	×	×	×	2	6(1)	1	54(18)
捏鉢	34(16)	2	×	×	×	1	1(1)	×	38(17)
瓶	8(1)	1	×	×	×	1	5	1	16(1)
褐釉陶器	2	×	×	×	×	×	×	×	2
壺	1	×	×	×	×	×	×	×	1
不明	1	×	×	×	×	×	×	×	1
不明陶器捏鉢	×	1(1)	×	×	×	1(1)	×	×	2(2)
龍泉窯系青磁	40(12)	×	×	×	×	×	7(5)	7(7)	54(33)
椀Ⅰ-5bc類	16(9)	×	×	×	×	×	4(4)	6(6)	26(19)
椀Ⅰ-5a類	15(7)	×	×	×	×	×	1(1)	1(1)	17(9)
椀Ⅰ-1~4類	3(2)	×	×	×	×	×	2	×	5(2)
椀・杯	6(3)	×	×	×	×	×	×	×	6(3)
不明青磁皿	1(1)	×	×	×	×	×	×	×	1(1)
白磁	11(7)	×	×	×	×	1(1)	3(3)	×	15(11)
皿Ⅸ類	8(5)	×	×	×	×	1(1)	2(2)	×	11(8)
椀Ⅸ類	2(2)	×	×	×	×	×	1(1)	×	3(3)
その他	1	×	×	×	×	×	×	×	1
青白磁合子	2(2)	×	×	×	×	×	×	×	2(2)
滑石製石鍋	6(3)	×	×	1	×	×	2	1	10(3)
合計	1167(212)	13(3)	1(1)	21(3)	40(6)	43(7)	238(33)	24(10)	1547(275)
供膳具	936(167)	9(2)	×	17(3)	32(6)	10(4)	141(25)	19(9)	1164(216)
土師器	853(126)	9(2)	×	17(3)	30(5)	8(3)	129(17)	9(2)	1055(158)
青磁	41(22)	×	×	×	×	×	7(5)	7(7)	55(34)
瓦器	32(12)	×	×	×	2(1)	1	2	3	40(13)
白磁	10(7)	×	×	×	×	1(1)	3(3)	×	14(11)
煮炊具	72(22)	×	1(1)	2	×	21(2)	44(7)	4(1)	144(33)
土師器	65(18)	×	1(1)	1	×	19	41(6)	3(1)	130(26)
滑石製石鍋	6(3)	×	×	1	×	×	2	1	10(3)
瓦器	1(1)	×	×	×	×	2(2)	1(1)	×	4(4)
調理具	51(20)	3(1)	×	1	1	4(1)	4(1)	×	64(23)
須恵器	34(16)	2	×	×	×	1	1(1)	×	38(17)
瓦器	15(4)	×	×	1	×	×	2	×	18(4)
土師器	2	×	×	×	1	2	1	×	6
不明陶器	×	1(1)	×	×	×	1(1)	×	×	2(2)
貯蔵具	10(1)	1	×	×	×	1	5	1	18(1)
須恵器	8(1)	1	×	×	×	1	5	1	16(1)
瓦器	1	×	×	×	×	×	×	×	1
褐釉陶器	1	×	×	×	×	×	×	×	1
その他・不明	98(2)	×	×	1	7	7	44	×	157(2)
土師器	94	×	×	1	7	7	44	×	153
青白磁	2(2)	×	×	×	×	×	×	×	2(2)
褐釉陶器	1	×	×	×	×	×	×	×	1
白磁	1	×	×	×	×	×	×	×	1
合計	1167(212)	13(3)	1(1)	21(3)	40(6)	43(7)	238(33)	24(10)	1547(275)

VI. 観音遺跡出土容器類の定量分析

別（供膳具：皿・杯・碗，煮炊具：鍋・湯釜・石鍋，調理具：捏鉢，貯蔵具：瓶・壺）で分類集計した。種別分類のうち，陶器は褐釉陶器と不明陶器に，青磁は龍泉窯系青磁と不明青磁に細別した。器種のうち，土師器皿・杯はひとつの単位とし，土師器鍋は徳永の分類 [1990] を用い，青磁・白磁は森田・横田の分類 [1978] を用いて細分した。鉢は確実に擂目が入っているものは確認できなかったので，すべて捏鉢とした。また，口縁部破片数によって，個体数の最低限度量は示されると考える。なお，標準型コンテナバット2個分の出土遺物を分類集計するのに要した時間は，整理作業員1名の支援を受けて2時間程度であった。

結果 Tab. 1は，観音遺跡1区で出土した容器類総破片数1,547点（口縁部破片数275点）の分類集計の結果をまとめたものである。補足しておくとして，土師器〈その他・不明〉のうち1点は火鉢（Fig. 28-4），須恵器捏鉢は在地系と思われる1点（Fig. 22-67）を除きすべて東播系，白磁その他は小壺（Fig. 21-60）である。1点ある瓦器瓶は軟質で外面に格子タタキ目をもつもので，佐賀平野では少量出現している。須恵器瓶には，佐賀市周辺でよく出現する産地不明の内面ナデとハケ目で外面格子タタキ目のものと，軟質で瓦器に近い焼成の内面ヘラ研磨で外面に格子タタキ目と印花文をもつ特異なもの（Fig. 23-78ほか）がある。

Fig. 30は，総破片数による器種・種別・形態類別の組成量を表現したグラフである。百分率は全体で100となるように小数点第1位で調整した。形態類別組成量では，器種の〈その他・不

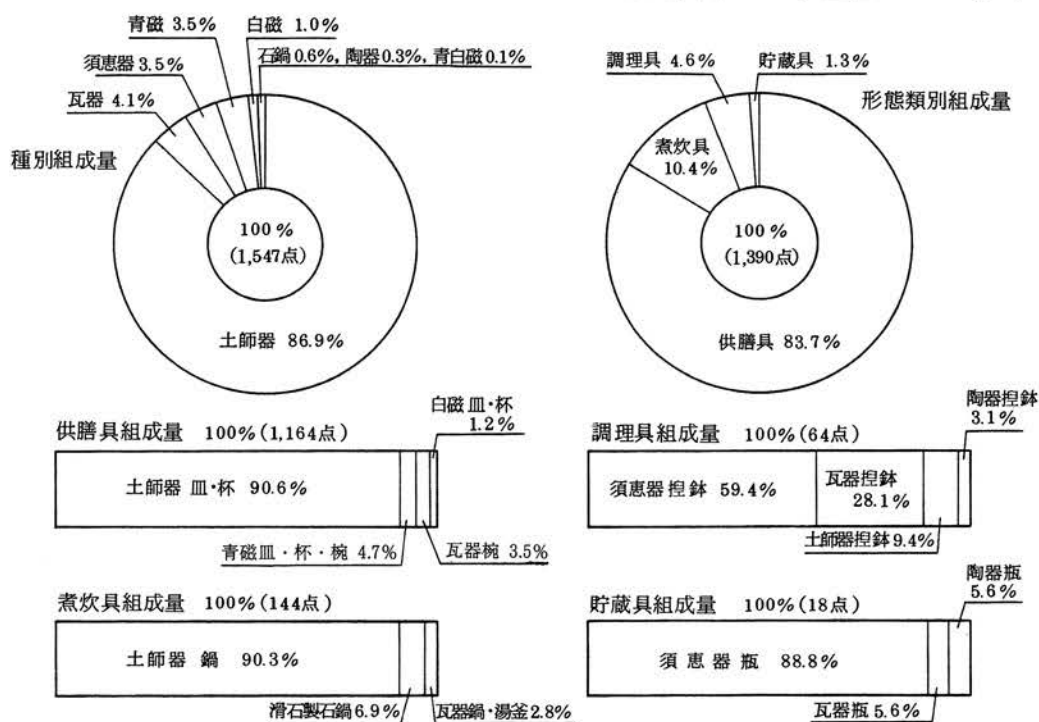


Fig. 29 観音遺跡1区出土容器類の組成量

VI. 観音遺跡出土容器類の定量分析

明〉は除外してある。気になるのは、磨耗が全体に激しく土師器の器種分類の不明率が11.3%と高い点で、皿・杯・鉢・鍋の定量に対してノイズが増大している結果になっているかもしれない。

考察 観音遺跡1区と本村遺跡1区の遺跡の差異（資料の条件付け）をある程度明確にする必要がある。本村遺跡が屋敷地の大部分を発掘調査の対象としたのに対し、観音遺跡は集落であることは確実だがどのような場所にあたるかは不明である。年代的には、本村遺跡は13世紀前後を主体に11世紀末～14世紀前半の長い期間に容器類の年代が散らばるが、観音遺跡の容器類は13世紀中頃を主体とし13世紀前半～15世紀代（下限となるSK004の土師器がよくわからない）の範囲にまばらに散らばる。また、面積に比べ観音遺跡の破片数は多いが、一つの遺構（SD001）に偏る傾向が極端である。

(1) 器種組成 本村遺跡に対し、年代的な要因から黒色土器碗・瓦器皿・同安窯系青磁碗・皿を欠く。常滑焼瓶・鉢を欠くのは観音遺跡容器類の主体的な年代が14世紀前半からずれているためである。土師器鍋Ⅱ類に付属すると思われる土製支脚が欠けるのは偶然か。

(2) 種別組成量 土師器は本村遺跡の67.0%に比べ86.9%と圧倒的に高率であるが、瓦器は21.2%に比べ4.1%と極端に低い。須恵器（2.1%：3.5%）の比率がやや違うのは、観音遺跡の調理具の比率が相対的に高く須恵器捏鉢がその主体なすためである。青磁（3.1%：3.5%）・白磁（1.4%：1.0%）・滑石製石鍋（0.8%：0.6%）・陶器（1.1%：0.3%）の比率差はどれも1%以内で相対的に安定している。土師器と瓦器の比率が極端に違うのは、観音遺跡が瓦器碗が盛行する12世紀を主体的な年代としないからである。青磁・白磁の比率が安定的であるのは興味深く、感覚的に青磁・白磁の出土が目立つようでも定量化すればこのへんの数値に落ち着く公算が高い。

(3) 形態類別組成量 供膳具が本村遺跡の75.2%に対し83.7%を示し、煮炊具（19.8%：10.4%）も相対的に安定しない結果を示すのは、前述した土師器分類のノイズにより観音遺跡の煮炊具の比率が低下している可能性がある。調理具（2.7%：4.6%）は観音遺跡が相対的に増加し、貯蔵具（2.0%：1.3%）は相対的に安定している。

(4) 供膳具組成量 土師器が本村遺跡の49.5%に対し90.6%を占め、瓦器が32.1%と3.5%であるのは、前述した年代的要因による。青磁（4.9%：4.7%）・白磁（2.0%：1.2%）は安定的であるが、白磁が相対的に減少しているのは年代的要因か。

(5) 煮炊具組成量 土師器鍋類は本村遺跡の91.4%に対し観音遺跡は90.3%とほぼ相対的に安定し、滑石製石鍋（5.0%：6.9%）も大きな差はない。観音遺跡が新しい年代にかかるため組成に瓦器鍋・湯釜が出現している。

(6) 調理具組成量 須恵器が本村遺跡の54.4%に対し観音遺跡が59.4%、瓦器が25.6%に対し28.1%で、ともに相対的にやや増えている。その分、土師器（13.6%：9.4%）・陶器（6.4%：

VI. 観音遺跡出土容器類の定量分析

3.1%)が相対的に減少しているが、土師器鉢類の定量には前述したノイズが入っている可能性がある。

(7) 貯蔵具組成量 須恵器が本村遺跡の50.0%に対し観音遺跡で88.8%,瓦器が1.1%に対し5.6%であるのは、観音遺跡の組成に常滑焼を欠くためである。褐釉陶器類の比率(20.2%:5.6%)は遺跡の内的あるいは環境的要因によるものか。

まとめ 土師器の分類に関してややノイジーであり、集落に対する発掘調査区の位置も異なるが、年代的な要因を考慮すれば種別組成量や形態類別組成量における本村遺跡との極端な差異は説明できる。したがって、本村遺跡で示された中世前半の集落遺跡における容器類使用形態の一般的説明を変更する必要はない。ただ、一般に総資料数の減少に比例して微量分類単位の比率は見かけの上では増大するので、中国産輸入褐釉陶器類の比率(20.2%:5.6%)は、本村遺跡に対する観音遺跡の内的あるいは環境的要因による条件の違いであろう。褐釉陶器が貯蔵具組成量で在地系の須恵器瓶を定常的に補完する存在であるかは、今後さらに検討を要する。また、13世紀中頃以後木製椀に置換され消失するとされる瓦器椀は、観音遺跡の比率でみると量的に減少しながら消失する可能性が指摘できるかもしれない。木製椀の量的な増大に関しては今のところ検証不可能であるが、これを想定しないと13世紀後半以後輸入磁器以外に椀形態が消失する現象に対し理由を説明できない。(前田)

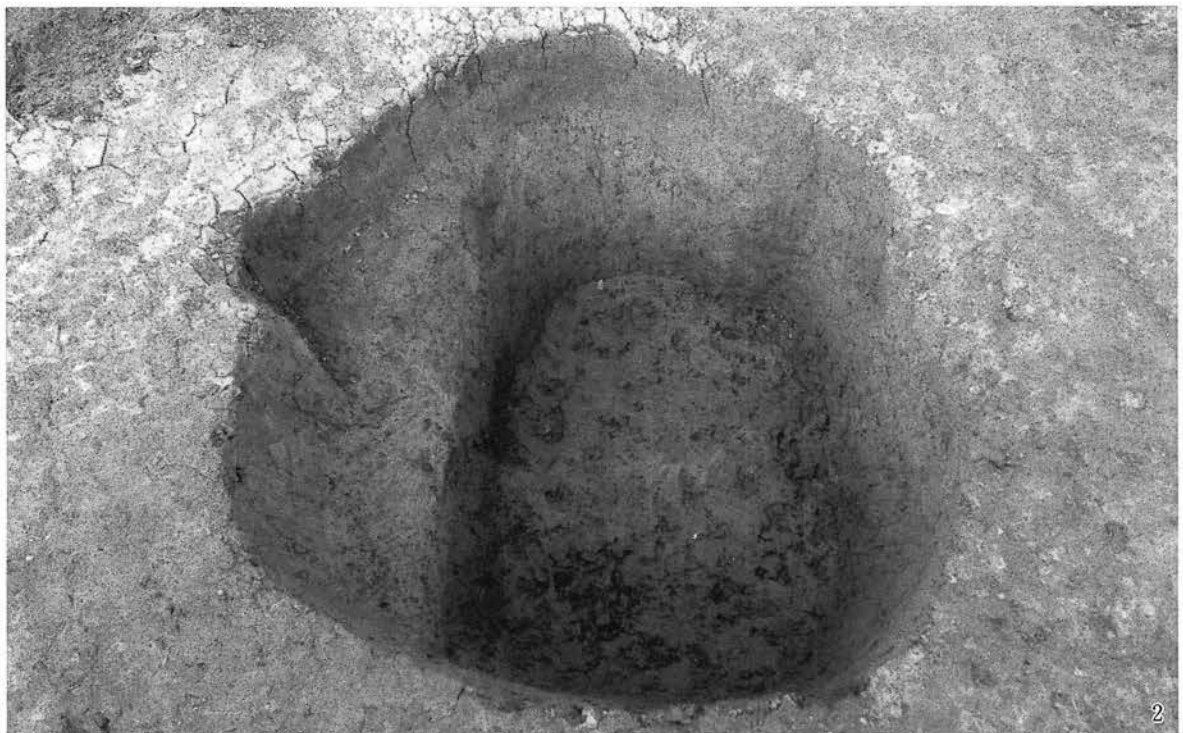
文献一覧

- 徳永貞紹 [1990]: 肥前における中世後期の在出土器。中近世土器の基礎研究VI, 93-108, 日本中世土器研究会。
- 徳永貞紹・宮武正登 [1991]: 本村遺跡 (佐賀県文化財調査報告書102), 佐賀県教育委員会。
- 福田義彦 [1983]: 柴尾橋下流遺跡 (佐賀市文化財調査報告書14), 佐賀市教育委員会。
- 福田義彦 [1984]: 蓮池上天神遺跡 (佐賀市文化財調査報告書15), 佐賀市教育委員会。
- 福田義彦 [1990a]: 阿高遺跡 (佐賀市文化財調査報告書30), 佐賀市教育委員会。
- 福田義彦 [1990b]: 牟田寄遺跡 (佐賀市文化財調査報告書31), 佐賀市教育委員会。
- 福田義彦 [1992]: 阿高遺跡・寺裏遺跡・梅屋敷遺跡 (佐賀市文化財調査報告書40), 佐賀市教育委員会。
- 福田義彦 [1993]: 牟田寄遺跡 (佐賀市文化財調査報告書49), 佐賀市教育委員会。
- 前田達男・牟田裕二 [1992]: 瓦町遺跡 (佐賀市文化財調査報告書42), 佐賀市教育委員会。
- 前田達男・福田義彦・西田巖・木島慎治 [1990]: 南宿遺跡・本村遺跡・阿高遺跡・牟田寄遺跡・村徳永遺跡・古村遺跡 (佐賀市文化財調査報告書28), 佐賀市教育委員会。
- 森田勉・横田賢次郎 [1978]: 大宰府出土の輸入中国陶磁器について—型式分類と編年を中心として—。九州歴史資料館研究論集4, 1-26, 九州歴史資料館。



1 : 観音遺跡 1区全景 (南から)

2 : SE005 井戸



1 : SK007 土壤
2 : SK008 土壤



1



10



2



11



3



4



12



5



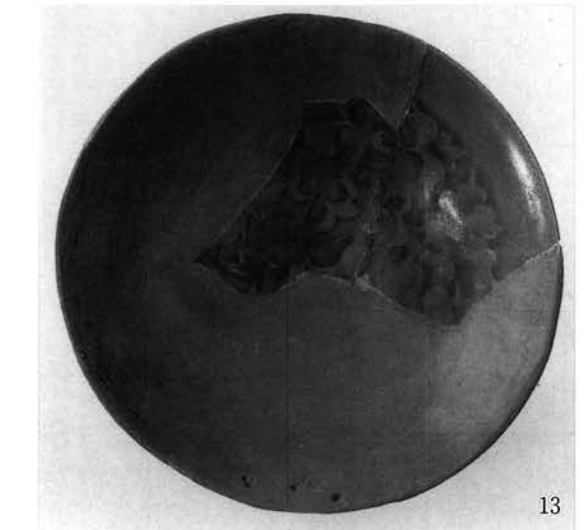
6



7



8



13



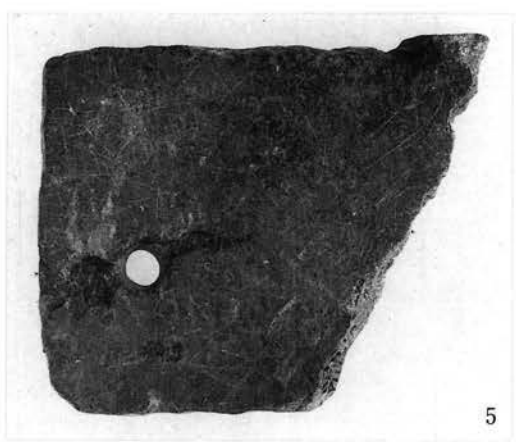
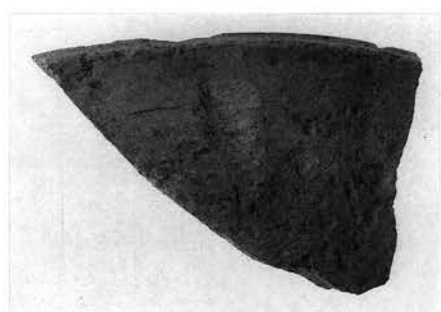
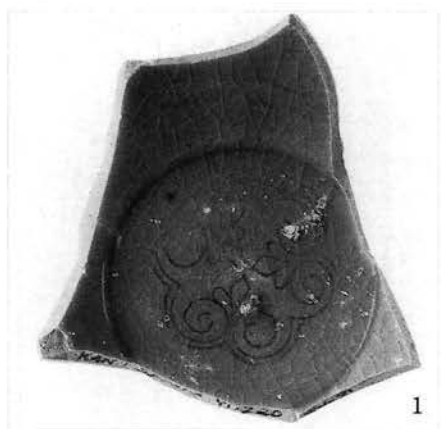
9

1 : SK004 (Fig. 10-1)
 2 : SD001 (Fig. 18-8)
 3 : SK007 (Fig. 12-2)
 4 : SK007 (Fig. 12-1)

5 : SD001 (Fig. 18-11)
 6 : SD001 (Fig. 18-5)
 7 : SD001 (Fig. 18-19)
 8 : SD001 (Fig. 19-24)

9 : SD001 (Fig. 19-23)
 10 : SD001 (Fig. 19-21)
 11 : SD001 (Fig. 19-29)
 12 : SD001 (Fig. 19-32)

13 : SD001 (Fig. 21-55)



1 : SD001 (Fig. 21-52)
2 : SD010 (Fig. 28-3)
3 : SD001 (Fig. 23-76)

4. SD001 (Fig. 22-64)
5 : SD001 (Fig. 25-90)
6 : SD001 (Fig. 25-91)

7 : SD001 (Fig. 25-92)

観音遺跡1区 (KAN-1) I種 収藏品目録

番 号	名称	種 別	計測値 ()内は復元値・残存値			遺構	実測図	挿図	収納
KAN-1-001	皿	土師器	口径(9.6)	底径(7.8)	器高 1.4	SD001	001	18-17	1
KAN-1-002	皿	土師器	口径 8.6	底径 7.3	器高 1.4	SD001	002	18-11	1
KAN-1-003	皿	土師器	口径 8.5	底径 7.2	器高 1.3	SD001	003	18- 8	1
KAN-1-004	皿	土師器	口径(8.1)	底径(6.3)	器高 1.4	SD001	004	18- 5	1
KAN-1-005	皿	土師器	口径(8.4)	底径 6.9	器高 1.4	SD001	005	18-10	1
KAN-1-006	皿	土師器	口径(7.9)	底径(7.0)	器高 1.5	SD001	006	18- 4	1
KAN-1-007	皿	土師器	口径(8.3)	底径(7.2)	器高 1.4	SD001	007	18-14	1
KAN-1-008	皿	土師器	口径(8.6)	底径(6.9)	器高 1.6	SD001	008	18-12	1
KAN-1-009	皿	土師器	口径(8.6)	底径(7.4)	器高 1.6	SD001	009	18-13	1
KAN-1-010	皿	土師器	口径(7.7)	底径(6.3)	器高 1.5	SD001	010	18- 2	1
KAN-1-011	皿	土師器	口径(8.0)	底径(7.4)	器高 1.4	SD001	011	18- 6	1
KAN-1-012	皿	土師器	口径(9.6)	底径(7.9)	器高 1.1	SD001	012	18-16	1
KAN-1-013	皿	土師器	口径(8.0)	底径(6.0)	器高 1.7	SD001	013	18- 7	1
KAN-1-014	皿	土師器	口径(9.0)	底径(7.2)	器高 1.5	SD001	014	18-15	1
KAN-1-015	皿	土師器	口径(7.6)	底径(6.0)	器高 1.3	SD001	015	18- 1	1
KAN-1-016	皿	土師器	口径(8.2)	底径(6.3)	器高 1.5	SD001	016	18- 9	1
KAN-1-017	皿	土師器	口径(7.7)	底径(6.1)	器高 1.5	SD001	017	18- 3	1
KAN-1-018	杯	土師器	口径12.1	底径 10.0	器高 2.8	SD001	018	19-21	1
KAN-1-019	杯	土師器	口径 —	底径(9.2)	器高(1.5)	SD001	019	19-27	1
KAN-1-020	杯	土師器	口径 13.0	底径 8.8	器高 3.4	SD001	020	19-24	1
KAN-1-021	杯	土師器	口径 12.7	底径 9.8	器高 2.9	SD001	021	19-23	1
KAN-1-022	杯	土師器	口径(11.7)	底径 8.6	器高 2.9	SD001	022	18-19	1
KAN-1-023	杯	土師器	口径(12.1)	底径 8.8	器高 2.6	SD001	023	18-20	1
KAN-1-024	杯	土師器	口径(10.6)	底径(8.0)	器高 2.9	SD001	024	18-18	1
KAN-1-025	杯	土師器	口径(14.6)	底径 13.2	器高 2.8	SD001	025	19-25	1
KAN-1-026	杯	土師器	口径(12.2)	底径(8.6)	器高 2.7	SD001	026	19-22	1
KAN-1-027	杯	土師器	口径 —	底径(9.6)	器高(2.2)	SD001	027	19-28	1
KAN-1-028	杯	土師器	口径 —	底径 8.4	器高(1.8)	SD001	028	19-26	1
KAN-1-029	高杯	土師器	口径 —	底径 —	器高(6.2)	SD001	029	—	1
KAN-1-030	鍋	土師器	口径 —	底径 —	器高(6.3)	SD001	030	24-84	1
KAN-1-031	鍋	土師器	口径 —	底径 —	器高(9.1)	SD001	031	23-80	1
KAN-1-032	鍋	土師器	口径(35.6)	底径 —	器高(6.1)	SD001	032	24-82	1
KAN-1-033	鍋	土師器	口径 —	底径 —	器高(4.3)	SD001	033	23-81	1
KAN-1-034	把手					SD001	034	—	1
KAN-1-035	椀	瓦 器	口径 15.2	底径 6.4	器高 6.9	SD001	035	19-29	1
KAN-1-036	椀	瓦 器	口径(16.5)	底径(6.1)	器高6.9	SD001	036	19-32	1
KAN-1-037	椀	瓦 器	口径 17.4	底径 6.2	器高 6.1	SD001	037	20-36	1
KAN-1-038	椀	瓦 器	口径(15.5)	底径 —	器高 (6.1)	SD001	038	20-34	1
KAN-1-039	椀	瓦 器	口径(15.8)	底径 —	器高(5.3)	SD001	039	19-30	1
KAN-1-040	椀	瓦 器	口径(15.4)	底径 —	器高(5.3)	SD001	040	20-33	1

観音遺跡1区 (KAN-1) I種 収蔵品目録

番 号	名称	種 別	計測値 ()内は復元値・残存値			遺構	実測図	挿図	収納
KAN-1-041	椀	瓦 器	口径—	底径(6.0)	器高(3.8)	SD001	041	20-35	1
KAN-1-042	椀	瓦 器	口径—	底径(5.9)	器高(2.7)	SD001	042	19-31	1
KAN-1-043	鉢	瓦 器	口径(18.6)	底径—	器高(6.5)	SD001	043	22-66	1
KAN-1-044	鉢	瓦 器	口径(16.7)	底径 8.3	器高 7.5	SD001	044	22-65	1
KAN-1-045	鉢	瓦 器	口径(17.3)	底径—	器高(4.7)	SD001	045	22-64	1
KAN-1-046	鉢	瓦 器	口径—	底径—	器高(6.4)	SD001	046	22-63	1
KAN-1-047	鍋	土 師 器	口径(42.0)	底径—	器高(13.9)	SD001	047	24-83	3
KAN-1-048	鉢	須 恵 器	口径(13.0)	底径—	器高(4.0)	SD001	048	23-75	1
KAN-1-049	鉢	須 恵 器	口径—	底径—	器高(4.2)	SD001	049	22-69	1
KAN-1-050	鉢	須 恵 器	口径(21.4)	底径—	器高(7.4)	SD001	050	22-71	1
KAN-1-051	鉢	須 恵 器	口径(27.6)	底径—	器高(4.8)	SD001	051	23-76	1
KAN-1-052	鉢	須 恵 器	口径—	底径—	器高(4.2)	SD001	052	22-68	1
KAN-1-053	鉢	須 恵 器	口径(23.4)	底径—	器高(5.2)	SD001	053	22-72	1
KAN-1-054	鉢	須 恵 器	口径(23.6)	底径—	器高(4.8)	SD001	054	22-73	1
KAN-1-055	鉢	須 恵 器	口径—	底径—	器高(4.8)	SD001	055	22-70	1
KAN-1-056	鉢	須 恵 器	口径(32.4)	底径—	器高(3.1)	SD001	056	23-77	1
KAN-1-057	鉢	須 恵 器	口径(25.4)	底径—	器高(6.1)	SD001	057	22-67	1
KAN-1-058	鉢	須 恵 器	口径—	底径—	器高(6.9)	SD001	058	23-74	1
KAN-1-059	鍋	滑石製品	口径—	底径—	器高(4.5)	SD001	059	24-87	1
KAN-1-060	瓶	須 恵 器	口径—	底径—	器高(6.5)	SD001	060	23-78	1
KAN-1-061	壺	陶 器	口径—	底径 6.8	器高(3.5)	SD001	061	23-79	1
KAN-1-062	鍋	瓦 器	口径—	底径—	器高(3.4)	SD001	062	24-85	1
KAN-1-063	椀	青 磁	口径 16.2	底径 6.0	器高 6.4	SD001	063	20-41	1
KAN-1-064	椀	青 磁	口径(15.7)	底径—	器高(5.1)	SD001	064	20-44	1
KAN-1-065	椀	青 磁	口径(15.0)	底径—	器高(2.8)	SD001	065	20-39	1
KAN-1-066	椀	青 磁	口径(15.7)	底径—	器高(3.8)	SD001	066	20-47	1
KAN-1-067	椀	青 磁	口径(15.7)	底径—	器高(4.9)	SD001	067	20-46	1
KAN-1-068	椀	青 磁	口径(15.7)	底径—	器高(3.9)	SD001	068	20-45	1
KAN-1-069	椀	青 磁	口径(15.7)	底径—	器高(3.5)	SD001	069	20-43	1
KAN-1-070	椀	青 磁	口径(15.9)	底径—	器高(2.7)	SD001	0070	20-48	1
KAN-1-071	椀	青 磁	口径—	底径 5.8	器高(2.6)	SD001	071	21-52	1
KAN-1-072	椀	青 磁	口径—	底径 6.2	器高(1.9)	SD001	072	20-42	1
KAN-1-073	椀	青 磁	口径—	底径 4.2	器高(2.8)	SD001	073	20-38	1
KAN-1-074	椀	青 磁	口径—	底径 5.5	器高3.1)	SD001	074	21-53	1
KAN-1-075	椀	青 磁	口径—	底径 5.5	器高(2.6)	SD001	075	21-51	1
KAN-1-076	椀	青 磁	口径—	底径 6.4	器高(1.9)	SD001	076	21-50	1
KAN-1-077	椀	青 磁	口径—	底径 5.8	器高(4.2)	SD001	077	20-40	1
KAN-1-078	椀	青 磁	口径—	底径 5.1	器高(5.3)	SD001	078	20-49	1
KAN-1-079	椀	青 磁	口径(10.0)	底径 3.8	器高 4.2	SD001	079	20-37	1
KAN-1-080	皿	青 磁	口径(17.7)	底径(5.8)	器高 4.5	SD001	080	21-55	2

観音遺跡1区 (KAN-1) I種 收藏品目録

番 号	名称	種 別	計測値 ()内は復元値・残存値			遺構	実測図	挿図	収納
KAN-1-081	皿	青 磁	口径(13.8)	底径 —	器高(2.4)	SD001	081	21-54	2
KAN-1-082	皿	白 磁	口径(11.0)	底径 6.1	器高 3.7	SD001	082	21-57	2
KAN-1-083	皿	白 磁	口径(9.5)	底径 5.7	器高 2.5	SD001	083	21-56	2
KAN-1-084	椀	白 磁	口径(13.7)	底径 4.9	器高 6.0	SD001	084	21-58	2
KAN-1-085	椀	白 磁	口径(13.8)	底径 —	器高(4.8)	SD001	085	21-59	2
KAN-1-086	不明	白 磁	口径 —	底径 3.1	器高(3.3)	SD001	086	21-60	2
KAN-1-087	合子	青 白 磁	口径(7.6)	底径 —	器高(4.0)	SD001	087	22-62	2
KAN-1-088	合子	青 白 磁	口径(5.5)	底径 —	器高(2.3)	SD001	088	22-61	2
KAN-1-089	鍋	滑石製品	口径 —	底径 —	器高(4.9)	SD001	089	24-88	2
KAN-1-090	鍋	滑石製品	口径 —	底径 —	器高(4.4)	SD001	090	24-87	2
KAN-1-091	鍋	滑石製品	口径 —	底径 —	器高(6.0)	SD001	091	24-87	2
KAN-1-092	鍋	滑石製品	口径 —	底径(25.8)	器高(4.5)	SD001	092	24-89	2
KAN-1-093	不明	滑石製品	長さ 9.3	幅(11.2)	厚さ 1.8	SD001	093	25-90	2
KAN-1-094	不明	滑石製品	長さ 5.9	幅 4.8	厚さ 2.1	SD001	094	25-91	2
KAN-1-095	砥石	石 製 品	長さ(6.9)	幅(5.9)	厚さ 3.3	SD001	095	25-93	2
KAN-1-096	不明	石 製 品	長さ 12.7	幅 6.7	厚さ 1.5	SD001	096	25-92	2
KAN-1-097	瓶	須 恵 器	口径 —	底径 —	器高(6.4)	SD002	097	—	2
KAN-1-098	鉢	陶 器	口径 —	底径 —	器高(8.1)	SD002	098	26-2	2
KAN-1-099	椀	青 磁	口径 —	底径 4.8	器高(1.4)	SD002	099	26-1	2
KAN-1-100	鍋	土 師 器	口径 —	底径 —	器高(8.0)	SE003	100	6-1	2
KAN-1-101	杯	土 師 器	口径 —	底径 —	器高(1.3)	SK004	101	10-3	2
KAN-1-102	杯	土 師 器	口径 6.1	底径 4.2	器高 2.3	SK004	102	10-1	2
KAN-1-103	杯	土 師 器	口径 —	底径(5.4)	器高(2.3)	SK004	103	10-2	2
KAN-1-104	杯	土 師 器	口径 —	底径 9.7	器高(2.4)	SK007	104	12-4	2
KAN-1-105	皿	土 師 器	口径 9.0	底径 7.2	器高 2.7	SK007	105	12-2	2
KAN-1-106	皿	土 師 器	口径 8.8	底径 7.4	器高 1.4	SK007	106	12-1	2
KAN-1-107	皿	土 師 器	口径 9.7	底径 7.6	器高 1.8	SK007	107	12-3	2
KAN-1-108	鉢	土 師 器	口径 —	底径 —	器高(5.0)	SK007	108	12-6	2
KAN-1-109	椀	瓦 器	口径(15.8)	底径 —	器高(3.6)	SK007	109	12-5	2
KAN-1-110	杯	土 師 器	口径(12.5)	底径 9.4	器高 2.7	SD010	110	28-2	2
KAN-1-111	皿	土 師 器	口径 8.8	底径 6.9	器高 1.4	SD010	111	28-1	2
KAN-1-112	鉢	土 師 器	口径 —	底径 —	器高(4.1)	SD010	112	28-5	2
KAN-1-113	不明	土 師 器	口径 —	底径 —	器高(2.3)	SD010	113	28-4	2
KAN-1-114	釜	瓦 器	口径 —	底径 —	器高(4.4)	SD010	114	28-3	2
KAN-1-115	釜	瓦 器	口径 —	底径 —	器高(6.5)	SD010	115	28-6	2
KAN-1-116	鉢	陶 器	口径(28.6)	底径(16.1)	器高 10.0	SD010	116	28-7	2
KAN-1-117	杯	土 師 器	口径(12.2)	底径(8.2)	器高 3.0	SK011	117	15-5	2
KAN-1-118	杯	土 師 器	口径(9.4)	底径 5.4	器高 2.7	SK011	118	15-4	2
KAN-1-119	杯	土 師 器	口径(14.8)	底径(12.8)	器高 3.0	SK011	119	15-6	2
KAN-1-120	皿	土 師 器	口径(9.2)	底径(7.8)	器高 1.7	SK011	120	15-2	2

観音遺跡1区 (KAN-1) I種 收藏品目録

番号	名称	種別	計測値 ()内は復元値・残存値			遺構	実測図	挿図	収納
KAN-1-121	皿	土師器	口径(9.2)	底径(7.6)	器高 1.4	SK011	121	15- 3	2
KAN-1-122	皿	土師器	口径(8.6)	底径 7.0	器高 1.7	SK011	122	15- 1	2
KAN-1-123	鍋	土師器	口径(41.0)	底径 —	器高(12.8)	SK011	123	16-17	3
KAN-1-124	鍋	瓦器	口径 —	底径 —	器高(3.3)	SK011	124	15-14	2
KAN-1-125	釜	瓦器	口径 —	底径 —	器高(5.2)	SK011	125	15-15	2
KAN-1-126	鉢	須恵器	口径 —	底径 —	器高(8.4)	SK011	126	15-12	2
KAN-1-127	瓶	須恵器				SK011	127	15-13	2
KAN-1-128	椀	青磁	口径 —	底径 —	器高(4.4)	SK011	128	15- 8	2
KAN-1-129	椀	青磁	口径(16.8)	底径 —	器高(3.9)	SK011	129	15- 7	2
KAN-1-130	椀	白磁	口径(12.8)	底径 —	器高(4.4)	SK011	130	15-11	2
KAN-1-131	皿	白磁	口径 —	底径 —	器高(3.2)	SK011	131	15- 9	2
KAN-1-132	皿	白磁	口径 —	底径(7.0)	器高(2.3)	SK011	132	15-10	2
KAN-1-133	鍋	滑石製品	口径 —	底径 —	器高(4.8)	SK011	133	15-16	2
KAN-1-134	瓶	須恵器	口径 —	底径(28.0)	器高(6.4)	表採	134	—	2
KAN-1-135	椀	青磁	口径(13.0)	底径 —	器高(6.1)	表採	135	—	2
KAN-1-136	椀	青磁	口径(16.8)	底径 —	器高(5.0)	表採	136	—	2
KAN-1-137	椀	青磁	口径(15.9)	底径 —	器高(5.4)	表採	137	—	2
KAN-1-138	椀	青磁	口径(16.3)	底径 —	器高(4.3)	表採	138	—	2
KAN-1-139	椀	青磁	口径(16.5)	底径 —	器高(4.1)	表採	139	—	2
KAN-1-140	椀	染付	口径(9.7)	底径 —	器高(3.9)	表採	140	—	2
KAN-1-141	椀	染付	口径(11.4)	底径(4.1)	器高 6.0	表採	141	—	2
KAN-1-142	平瓦	瓦	長さ(10.6)	幅(12.4)	厚さ 1.9	表採	142	—	2

観音遺跡1区 (KAN-1) II種 收藏品目録

調査区	種別	遺構名	袋数	収納
KAN-1	土師器・須恵器・瓦器・ 瓦器・陶磁器	SD001・SD002・SK004・SK007・SD010・ SK011・表採	11	4

佐賀市文化財調査報告書第46集

観音遺跡

平成5年3月31日

発行 佐賀市教育委員会
佐賀市栄町1番1号

印刷 ㈱宮地印刷
佐賀市長瀬町11-20
TEL 0952(26)6135